

甲南英文学

No. 18  2003

甲南英文学会



編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

秋元孝文 高橋勝忠 田中紀子 *中島信夫 中島俊郎 横山三鶴

目次

- 『ドンビー父子』——ドンビーの人間復帰……大森 幸享 1
- 『ユーカリ林の少年』における
「闇の神」に関する一考察……上野 未央 11
- The Private Mary Chesnut* における女性たち……水本 有紀 27
- 星の音が聞こえる：Tess Gallagher の
“Rain Flooding Your Campfire”論……篁 雅明 39
- Repair Strategies in PF: *No-deletion* in
Japanese Noun Phrases……Yuko Maki, Fumikazu Niinuma 51



『ドンビー父子』——ドンビーの人間復帰

大森 幸享

SYNOPSIS

Dombey's fall is connected with alienation from his family and all that is kind-hearted and emotional. In *Dombey and Son*, Dombey gradually and tragically deepens his solitude. In delineating Dombey's fall, Dickens does not dichotomize punishment and reward. He sustains his conviction that Dombey is not evil but that his moral deviation and judgment are to be blamed. Dombey's heartless nature rejects homeliness and human sympathy as incompatibles, and represses them under his consciousness. In consequence, the unacceptable feelings threaten him. It is when Dombey regains homeliness that his pride opposes to his human nature, and that his complicated mind surfaces from his unconsciousness. Therefore the central concern in his novel is to probe into the mind of Dombey and see where the real problem lies. In this paper, Dombey's inner struggles are traced so as to find the cause of his fall and the way how he recovers his homeliness and warm-hearted personality.

1. 序論—判断の誤りによる道徳的逸脱

『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)は、19世紀イギリスの新興産業社会のなかに生じた拝金主義を非難し、会社を経営するドンビー(Dombey)の没落の原因を人間性と家庭性の欠如に見ようとする物語である。ドンビーの没落は家族の離反と連動して進み、次第に孤独な存在になってゆく悲劇の主人公の姿を描き出す。しかしながら、物語の結末における心理的現実に着目する Arlene M. Jackson も指摘しているように、ドンビーの結末は「罰と報いがそれほど容易に、あるいは明確に二分されてはいない。」¹ その根底には、ドンビーの行為を悪と見なすのではなく、判断の誤りによる道徳的逸脱としてとらえ、悔恨と和解とによって家庭性を回復したドンビーは許され得るのだとするディケンズの信念があるように思える。

ドンビーは、カーカー(Carker)やバグストック(Bagstock)のような邪な人間世界には属さないが、とはいえポール(Paul)やフロレンス(Florence)の愛情の世界にも属さず、陰鬱で暗い世界にひとり閉じ込められた存在である。道徳的逸脱へとド

ンビーを駆り立てるもの、そして彼と家族をささげるものは、家族関係も経済的必要性によって統合された他人同士の集団であるかのようにみなす彼の非情な考えに他ならない。つまり、家庭性の回復にこそドンビーの人間復帰の兆しがある。このように考えてみると、『ドンビー父子』では、機械的で冷酷なドンビーとは裏腹に、彼の発言や思い、そして行動の中に、その微妙な心の揺れを読み取ることができのではないだろうか。また、物語は自殺しようとするドンビーがフロレンスによって救済される場面ではほぼ完結をむかえているが、彼の没落から救済までをひとつの流れとしてとらえたならば、判断の誤りに気づき人間復帰するに至るドンビーの精神世界をより明確にとらえることができるのではないだろうか。本論では、ドンビーの心の奥底で揺れ動く葛藤を浮き彫りにし、いかにしてドンビーが家庭性を回復し、人間復帰するかを明らかにしていきたい。

2. ドンビーの失墜とその原因

ドンビーの内面を分析する際に重要となるのは、彼の家族観である。3章に見られるフィズ(‘Phiz,’ H. K. Browne, 1815-82)の挿絵‘The Dombey Family’に着目してみると、フロレンスは家族の集合肖像画の枠から外れ、彼女がドンビー家でどのように扱われているかを象徴的に示している。その挿絵の中央では、ドンビーが椅子に座り、左側には、ポールを抱いた乳母ポリー(Polly)が気まずい表情で立ち、右側の扉ではフロレンスが躊躇しながらもどかしげに手をねじり、父親の方へと悲哀に満ちた視線を送っている。この挿絵のアレゴリーによって、主人公であるドンビーの人間像を読者に対して視覚的に強く印象づけることが意図されている。つまり、この挿絵がドンビーの家族観を体現している。

ドンビーの価値基準に従えば、ドンビー父子商会の存続と発展において、ポールは重要な跡取り息子であり、会社が名実ともに“Dombey and Son”となるための不可欠な存在である。一方、フロレンスはポールの次に寵愛される存在となることもなく、価値のない“merely a piece of base coin”²とみなされる。ドンビーの家族に対する価値基準は、資本として価値があるかないかにある。したがって、彼がフロレンスを疎外する理由は、フロレンスが会社の跡継ぎになれない娘だからである。

親子の共同経営を実現するために、ドンビーはポールの幼児期を奪う。物語の早い段階でポールは死んでしまうが、その原因はドンビーがポールの生命時計を早め、時間的秩序をゆがめたからである。確かに、ドンビーはポールを寵愛した。しかし、それは“infant”(90)や“boy”(90)としてではなく、“a grown man”(90)や“the

‘Son’ of the Firm”(90)として寵愛したにすぎない。ドンビーは、6歳のポールが16歳であったらと途方もないことをピプチン夫人(Mrs Pipchin)に述べ、ポールが他の同年代の子どもたちよりも勉強が遅れているのではないかと心配する。そして環境が何もかもを左右するのだと断言し、ポールの教育方針を次のように述べる。

‘... Now, Mrs Pipchin, instead of being behind his peers, my son ought to be before them; far before them. There is an eminence ready for him to mount upon. There is nothing of chance or doubt in the course before my son. His way in life was clear and prepared, and marked out before he existed. The education of such a young gentleman must not be delayed. It must not be left imperfect. It must be very steadily and seriously undertaken, Mrs Pipchin.’ (137)

ポールの将来は約束された人生というよりも、束縛された人生といえる。なぜなら、ポール自身が望まないものを強制されるからである。ポールはフロレンスと引き離され、プリンパー博士の寄宿学校へ送られる。プリンパー学校では、機械的で詰め込み式の、子どもの想像力と子どもらしさを奪うような不適切な教育を受け、ポールはますます“old-fashioned”になる。ドンビーは、ピプチン夫人の教育方法のように、ポールに彼の好きなものを与えず、嫌いなものを与えている。

母親が死に、乳母が解雇された今となっては、ポールに残された愛情と安らぎの世界はフロレンスとの間にしか見出されない。ドンビーは、ポールとフロレンスとの結びつきが強いということ以上に、ふたりから“Shut out”(30)されることを恐れる。ドンビーは、ファニー(Fanny)とフロレンスとの関係に対して感じた孤立感を忘れることができない。次第に膨らむフロレンスの存在感によって、ドンビーの彼女に対する意識は強まる：“his previous feelings of indifference towards little Florence changed into an uneasiness of an extraordinary kind”(30-1)。これはドンビーがフロレンスを制御できないと気づいた印象的な場面といえる。ディケンズが1858年版の序文のなかで、「ドンビーは、内面の急激な変化を起こしたわけではない」³と述べたことを文字通りに解釈すれば、ドンビーのフロレンスに対する感情の変化を心の揺れと解釈することができよう。ポールが幸せを感じることできる唯一無二の世界をドンビー自身がさげろうとするのは、ドンビーの意識の中でフロレンスの存在が無視できないものとなったことを表している。したがって、ドンビーがポールを寄宿学校に入れることによって、フロレンスから引き離そうとしたことは重要な点である。すべてを自分の所有物と考えるドンビーが支

配できないものこそ、フロレンスの感化力である。ポーリーは、“Nothing could be better than Miss Florence”(30)とドンビーに言い、ポールにはフロレンスが必要不可欠であることを疑わない。同様に、ポールをピプチン夫人のもとへ預ける際に、ルイーザは、“I don’t think you could send the child anywhere at present without Florence”(98)とドンビーに言う。ドンビーはフロレンスを軽視する一方で、実際に疎外されているのは自分なのではないかと感じはじめる。疎外感が危機感を生み、フロレンスに対する嫉妬心は、いまや憎悪へと変わろうとする。ドンビーがフロレンスとポールとの結びつきを断ち切ることは、フロレンスの影響力を弱めようとする行為といえる。

ドンビーの家族観は、冷淡な経営者のそれとして描き出される。家庭の領域が会社とビジネスによって侵食されてしまっており、それはとりもなおさず誇張されたヴィクトリア朝社会の姿を映し出す。Andrew Elfenbein が指摘するように、「ドンビーの住居は、典型的なヴィクトリア朝の家庭ではなく、会社のように営まれた結果、崩壊した家庭」である。⁴ ドンビーの家庭内には、父権と家父長制と会社組織が歪な形で混同している。たとえば、ドンビーが妻イーディス(Edith)に期待するものは、抑圧的なものとなる。

‘I am sorry, madam,’ said Mr Dombey, ‘that you should not have thought it your duty—’

She looked at him again.

‘Your duty, madam,’ pursued Mr Dombey, ‘to have received my friends with a little more deference. Some of those whom you have been pleased to slight to-night in a very marked manner, Mrs Dombey, confer a distinction upon you, I must tell you, in any visit they pay you.’ (500)

ドンビーは、イーディスに会社組織を形成するメンバーのひとりとしての義務の遂行を強いる。彼が彼女に期待したものは愛情ではなく、会社の一員として、さらにはドンビー父子商会の経営者ドンビーの妻としての義務を果たす人格を求める。

He had imagined that the proud character of his second wife would have been added to his own—would have merged into it, and exalted his greatness. He had pictured himself haughtier than ever, with Edith’s haughtiness subservient to his. He had never entertained the possibility of its arraying itself against him. (540)

ドンビーが自我を実現しようとするとき、彼女は鼻持ちならぬ高慢さをさらけ出す。結婚以来、ただドンビーの偉大さを引き立てる役目を背負わされたイーディスは、有無を言わず家父長制と会社組織の構図に組み込まれる。

ところが、イーディスは計略的な結婚の駒に使われたことに憤慨すると同時に、そうした自らの運命を嘆く女性である。彼女がドンビーを軽蔑する理由は、自分がお金で買われたという事実からである。ドンビーと同様にプライドの高いイーディスは、ドンビーの支配に対して毅然と立ち向かい、彼の思い通りになりはしないことを態度で明白に示す。42章でドンビーが落馬し傷を負って帰宅したときに、イーディスは心痛めることもなく、また彼に一言の遺憾の意を表すこともない。Elfenbeinが指摘するように、「ドンビーが落馬する場面は、彼がイーディスを制御できない、効果的なシンボル」となっている。⁵

自分自身の偉大さに包まれているドンビーは、イーディスの心をつかむことができない。それどころか、ドンビーは、敵対心をもち反抗的なイーディスに対して一歩も退かず、彼女に屈しまいと対抗する。イーディスがドンビーの期待を裏切るたびに、ふたりの関係も緊迫する。

‘Madam,’ said Mr Dombey, with his most offensive air of state, ‘I have made you my wife. You bear my name. You are associated with my position and my reputation. I will not say that the world in general may be disposed to think you honoured by that association; but I will say that I am accustomed to “insist,” to my connexions and dependents.’ (543)

ドンビーがイーディスを制御するためには、彼女を会社組織の一員とみなし、義務と命令を押し付ける以外にない。

しかし、ドンビーは家族を思うままに支配することはできない。彼の金銭主義が、フロレンスの感化力やイーディスの傲慢さを支配することはできない。作品は、フロレンスとイーディスの親密な関係が、ドンビーの家族観を脅かすという構図をとる。そこには、金銭で幸せは買えないのだとするディケンズの信念があるように思われる。ドンビーは、そのフロレンスとイーディスの関係からも閉め出され、家父長制を脅かすものがフロレンスであることに気づくと、フロレンスを徐々に強く意識するようになる。そしてその感情は、彼のプライドゆえに愛情を嫉妬心と憎しみとによって置き換えてしまう。

3. 家庭性の回復とドンビーの救済

ドンビーを没落から救済するのは、家庭性を失わないフロレンスの献身的な愛情である。ディケンズは、ドンビーを通して教訓的な物語を展開し、金銭崇拜を克服した愛情の勝利で結論づける。ドンビーが救済される人間でありえるのは、物語を通して、その描写の中に人間性の片鱗が見えるからである。

フィズによって描かれた『ドンビー父子』の月刊分冊の表紙には、ドンビーの出世、没落、そして救済の半生が時計回りに描かれている。Barbara Weiss はディケンズが考案したこの挿絵について、「回転する運命の車輪を印象的に描こうとしている」と述べている。⁶ その挿絵の左下では日の出を背景に、“ledger”を軽々と支えている自信溢れるドンビーの姿があり、その上方では“cash box”が積み上げられ、頂上で三重鍵の頑丈な“cash box”の上の玉座にドンビーが尊大な態度で座っている。そして、右方では、積み上げられたトランプが今にも崩れそうにドンビー邸を支え、その下方では日暮れと難破船を背景に、杖をついたドンビーが錢袋に押しつぶされながら邸を支えている。そして最後に左方にはフロレンスに支えられながら弱々しく歩く白髪のドンビーが描かれている。ディケンズが、ドンビーの没落から救済までを念頭においていたことは明らかである。

ドンビーの心に葛藤が生じ、人間性の片鱗を見せるときに、彼の意識の中で共通するものは、フロレンスの存在である。レミントン(Leamington)に向かう汽車の中で、ドンビーはフロレンスの顔を思い浮かべる。彼は自分が嫌悪し、拒絶してきたものが実は自分の無意識の世界に充滿していることを知らされ、それを意識の中に同化することができずに苦しむ。たしかに、ドンビーはフロレンスの“sweet, calm, gentle presence”(275)と、“loving and innocent face”(275)、それから“patience, goodness, youth, devotion, love”(275)を歓迎せず、拒絶し、娘への愛情が自分のなかに現れるはずがないと信じている。しかしながら、嫌悪感を抱いているとは語られない。それまでフロレンスを完全に否定してきたドンビーは、心の奥底にフロレンスを否定できない自分があることに気づき、フロレンスへの思いが膨れ上がり、無意識から意識の上へと上がってくることを恐れ戸惑う。そして、彼はフロレンスを拒絶することによって、彼女を肯定する気持ちを否定しようとする。このとき、フロレンスの感化力は、ドンビーにも影響していると考えられる。

35章で、ドンビーのフロレンスに対する否定的な感情が和らぐ場面も、フロレンスの感化力の影響といえる。眠った振りをしたドンビーは、針仕事をしているフロレンスをハンカチ越しに観察し、フロレンスに対して温かい気持ちを抱く。

But as he looked, he softened to her, more and more. As he looked, she became blended with the child he had loved, and he could hardly separate the two. As he looked, he saw her for an instant by a clearer and a brighter light, not bending over that child's pillow as his rival—monstrous thought—but as the spirit of his home, and in the action tending himself no less, as he sat once more with his bowed-down head upon his hand at the foot of the little bed. He felt inclined to speak to her, and call her to him. (485)

ドンビーの意識の中に、肯定されたフロレンスがいることが分かる。ここにドンビーの人間性の片鱗をみることができる。

さらに、自らの過ちに気づいたドンビーがまるで罪を贖うようにフロレンスを求める精神世界は、それまでの俗物的なドンビーとは対照的に、人間性が解き放たれた姿がある。会社が倒産してもなおプライドを持ち続けたドンビーは書斎へ閉じこもり、回想の中に膨れ上がるフロレンスの姿が彼を苦しめる。たとえ親切な人が手を差し伸べ、優しく接してくれたとしても、ドンビーは背を向け、孤独の殻のなかに閉じこもるのだ、と作者は語る。無意識下に抑圧されていたフロレンスへの愛情が意識化しようとする、その感情を否定しようとするプライドがドンビーに歯止めをかける。ところが、自我がプライドを支配したとき、ドンビーは孤独と悲惨さの中で、かつてフロレンスが父親の愛情を求めて降りていった階段を、後悔と懺悔の気持ちでゆっくりと上がってゆく。階段に残されたフロレンスの数え切れないほどの足跡を目にし、ドンビーはいかに自分が無知で不幸な人間なのかを知り、後悔の涙を流す。このとき、彼の無意識に抑圧された直視したいフロレンスへの愛情が表面化する。無意識なものや非合理的なものを抑圧し、自我によって得てきた富と名誉を失ったとき、ドンビーははるかに貴い人間性や家庭性を失ったことに気づく。

ドンビーの心の中で、フロレンスを求めようとする気持ちと、プライドを捨てまいとする気持ちとが闘い合う。たしかに、ドンビーの心の中は激しく揺らいでいるが、その気持ちを表に出さない限り、ドンビーとフロレンスとの関係は進展するはずはない。言い換えれば、表面的にはドンビーとフロレンスとの関係は、はじめから変わってはいない。それを明白に表しているのは、'Let him remember it in that room, years to come!'と銘打った59章の挿絵である。Q. D. Leavisが、その59章の挿絵と3章の挿絵'The Dombey Family'とを比較して指摘するように、「フ

フロレンスは‘The Dombey Family’の挿絵と同じような関係で、ドンビーを振り返って立っている。しかし、体はドンビーの反対を向き、まさに彼を置き去りにして出ていこうとしているとドンビーは思う。』⁷ただ、ドンビーがフロレンスに背を向けている理由は、‘The Dombey Family’とは異なり、無関心で背を向けているのではなく、フロレンスに会わせる顔がないからである。もはやフロレンスを直視しないのではなく、直視できないまでに、ドンビーの意識の中でフロレンスの存在感が膨れ上がっている。また、その2枚の挿絵は、ドンビーの家族観の原因と結果を示していると考えられる。彼が心を開き、フロレンスの愛情を受け入れられない限り、和解もドンビーの救済もありえない。‘Let him remember it in that room, years to come!’のなかで、ドンビーの書斎に差し込まれる光“a gleam of light; a ray of sun”(808)は、フロレンスの変わらぬ愛情の象徴と考えられる。それはまぎれもなく、孤独の書斎に巣くっていた陰鬱な闇から、ドンビーを出口へと導く希望の光である。狂わしいまでの自殺願望と自問自答するドンビーは、その光に心を留めない。そして、鏡の向こうに見える自分の疲憊しきった姿をおぼろげに見ながら、ドンビーは自殺する自分の姿を思い浮かべる。

しかし、ドンビーの“guilty hand”(808)が示すように、ディケンズは、ドンビーの自殺を罪とみなしている。自殺は神との訣別を意味する罪に問われる行為であり、自殺によって一切の苦しみを放棄した者は真の救済を得ることができない。ドンビーは罪滅ぼしのために死のうとしているのではない。むしろ、意識化したフロレンスへの愛情と、これまでの娘との関係に感じる劣等感とが競合し、後者が極端に強くなった結果、死を選ぼうとしているのである。つまり、自ら築いたフロレンスとの間の厚い壁を取り壊すのではなく、さらに壁を厚くして閉じこもろうとする。フロレンスは、ドンビーの側にある越えられない壁の向こうから父親の愛情を求め続けた。繰り返される“unchanged”という言葉が、あきらめずにドンビーの心が自分の方に向く日を願い続けたフロレンスの愛情の確かさを強調する。哀れにも父親から疎外された幼少期の寂しさと、父親に打たれて家を出た悲しみによって、父親との関係に絶望する瞬間もあったが、その深い愛情ゆえに父親を見捨てることはなかった。その確かなフロレンスの愛情を知り、ドンビーは赦しを請いながらしがみついたフロレンスに愛情で応える。想像ではなく、現実のフロレンスに会うことがドンビーの人間復帰を可能にしたといえる。ドンビーは、フロレンスに口づけすると上を見上げ、神に赦しを請う：“Oh my God, forgive me, for I need it very much!” (810) この単純にして率直な言葉は、人間性を取り戻したドンビーの心を示している。

4. 結論—罰と報いのパラドクス

ドンビーの家庭性の回復と救済が、彼の老齢化という時間的解決によってなされたことは否定できない。会社が倒産した後、書斎に閉じこもる60歳を越えたドンビーはやつれ衰え、罪の意識にさいなまされて精神衰弱に陥っている。⁸ 倒産によってすべてを失ったドンビーは、過去を振り返ることができ、結婚して母となったフロレンスを受け入れることができる。ディケンズは作品の中で、罰がなければ報いはありえないと主張しているわけである。一見、パラドクスのように見えるドンビーの結末において、倒産を罰とみなし、家庭性の回復、つまりフロレンスとの和解を報いとする、倒産が起こらなければフロレンスとの和解もないということになる。そのように考えれば、ドンビーの没落さえも肯定的なものとなり、ドンビーが人間復帰するために必要不可欠な出来事であるといえる。

しかし、フロレンスとの和解において、ドンビーの元へ戻ってきたフロレンスが、彼よりも先に赦しを請うことは注目すべきである。フロレンスはドンビーの足元にひざまずき、置き去りにしたことを詫びる：“Raising the same face to his, as on that miserable night. Asking his forgiveness!”(808) フロレンスがドンビーを赦すのではなく、フロレンスが父親の赦しを求めるところに、ふたりの関係が容易に解消されるものではないことを物語る。事実、長い年月を要して、ドンビーはフロレンスの家庭で心の傷を癒す。

この作品では、フロレンスが貫いた不変の愛情を尊ぶ精神と、ドンビーの判断の誤りを赦す寛大な心を追求している。フロレンスが不変の愛情でドンビーを求める限り、ドンビーが人間性を取り戻す機会を失うことはない。たとえ社会的成功を収めようとも、“greatness”に心を奪われ、思いやりや愛情を忘れて、富と名誉を求める姿に人間的墮落を見る。それは、ドンビーの家庭レベルの領域にとどまらず、拝金主義が高まったヴィクトリア朝社会全体にひろがるテーマとなっている。産業の発展に関してむしろ急進派であったディケンズは、人間性を犠牲にした産業発展を否定し、家庭性と愛情に支えられた社会を実現すべきであると訴えている。

注

本稿は、第18回甲南英文学会研究発表（2002年7月6日 於甲南大学）における口頭発表の草稿を加筆修正したものである。

- 1 Arlene Jackson. "Reward, punishment, and the conclusion of *Dombey and Son*." *Dickens Studies Annual* 7 (1978), 105.
- 2 Valerie Purton, ed., Charles Dickens, *Dombey and Son* (London: J. M. Dent, 1997) 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に示す。
- 3 Preface to the First Cheap Edition Reprinted in 1858. xli.
- 4 Andrew Elfenbein. "Managing the House in *Dombey and Son*: Dickens and the Use of Analogy." *Studies in Philology* 92 (1995), 375.
- 5 Arlene Jackson, 110-1.
- 6 Barbara Weiss. *The Hell of the English: Bankruptcy and the Victorian Novel* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1986), 17.
- 7 Leavis, F. R., Q. D. Leavis. *Dickens the Novelist*. (Harmondsworth: Penguin Books, 1972), 453.
- 8 ドンビーの年齢に関しては、T. W. Hill の "Dombey Notes" *Dickensian* 39 (1942) を参照。

参考文献

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. London: W. W. Norton & Company, Inc, 1973.
- Elfenbein, Andrew. "Managing the House in *Dombey and Son*: Dickens and the Use of Analogy." *Studies in Philology* 92, 1995.
- Harvey, John. *Victorian Novelists and Their Illustrators*. New York: New York University Press, 1971.
- Hill, T. W. "Dombey Notes." *Dickensian* 39, 1942.
- Howard, David, John Lucas, and John Goode, eds. *Tradition and Tolerance in Nineteenth-Century Fiction: Critical Essays on Some English and American Novels*. London: Routledge & K. Paul, 1966.
- Jackson, Arlene. "Reward, punishment, and the conclusion of *Dombey and Son*." *Dickens Studies Annual* 7, 1978.
- Leavis, F. R., Q. D. Leavis. *Dickens the Novelist*. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.
- Lerner, Laurene, *The Victorians*. New York: Holmes & Meier Publisher, 1978.
- Marcus, Steven. *Dickens from Pickwick to Dombey*. Simon and Schuster, 1965.
- Steig, Michael. *Dickens and Phiz*. Bloomington: Indiana University Press, 1978.
- Teisedou, Janie, ed. *Politics in Literature in the Nineteenth Century*. Lille: Université de Lille III, 1974.
- Weiss, Barbara. *The Hell of the English: Bankruptcy and the Victorian Novel*. Lewisburg: Bucknell University Press, 1986.
- アンガス・ウィルソン、松村昌家訳 『ディケンズの世界』東京：英宝社、1979年。
- 西條隆雄 『ディケンズの文学—小説と社会—』東京：英宝社、1998年。
- 松村昌家 『ディケンズの小説とその時代』東京：研究社、1989年。

『ユーカリ林の少年』¹における「闇の神」に関する一考察

上野 未央

SYNOPSIS

The Romantics tried to recover the religious faith which had been lost since the Enlightenment in the eighteenth century, by exploring the idea that God exists somehow diffused in nature. The “dark god” which Lawrence takes of, is based on the pantheistic idea of the Romantics. But it is not like the orthodox idea God, but rather a dark and invisible god.

In the Australian bush, Lawrence encountered what he calls “the spirit of place”, which seemed to him a great god that lay in the Australian blood. Lawrence hoped to have direct contact with the wild Australian bush to have close physical ties with “the spirit of place”. So in Australia Lawrence came to reject Christianity, and found in its place the great “dark god”, on which he would reflect in his later works. So it can be said that Australian experience was a turning point in Lawrencean literature.

1. はじめに

失われた人間と自然との本源的な共感の回復を希求したロレンス(D.H.Lawrence)の文学には、自然への共感を示したロマン主義的要素が様々な形で現れている。キリスト教があまりにも精神主義的で肉体を軽視し、人間に本来備わっていたはずの生命力を失わせたと考えたロレンスは、人間の生命と自然の生命とを関係づけ熟考することにおいて、自然の中に神を見出したワーズワス(William Wordsworth)の汎神論(“pantheism”)に、失われた生命力を回復するための何らかのヒントを得たのではないだろうか。さらにC.クラーク(Colin Clarke)の弁によれば、ロレンスはキーツ(John Keats)が「自己破壊」(“self destroying”)と呼ぶものに関心を持っていた。²「自己破壊」とは、死から再生にいたる過程で、人間は表層的な自我を捨て去り自らの深層を流れる生命の流れに溶け込むことで真の实在にいたることができるという理念を指す。ワーズワスの汎神論と人間の真の实在に関するこのようなキーツの理念を、ロレンスはより肉体的な生命を重視しながら独自のものへと発展させていく。そしてその過程の中で独自の神を見出すことになる。

神を自然の中に見出したことはロマン主義者たちの特徴としてあげられることであるが、それはロマン主義者たちが啓蒙主義における無神論に反対するにあたって信仰を取り戻すために、神を宇宙の「内部」に連れ戻すことで神を人間の自然性（本性）の中に見出そうとしたことによる。ところがその結果、ロマン主義者たちは神が人間を超越するものであるというよりは、むしろ人間の内面にあることを強調することになり、たとえばブレイク(William Blake)やシェリー(Percy Bysshe Shelly)などが人間を「神の似姿」³と言うように、人間を神格化し神の世俗化を招くことになってしまう。ロレンスも同じように自然の中に神を見出してはいるが、このような傾向に対しては同調できなかつたようだ。たしかにロレンスも、失われたコスモスとの生きたつながりを模索しながら自然の中に神を認めている。それは、イギリスの森の中に神を見出したワーズワスの汎神論的神に近いものであることは確かだ。ロレンスの処女作『白孔雀』(*The White Peacock*, 1911)に登場するアナブル(Annable)の場合を考えてみよう。アナブルはギリシャ神話に登場するパン神のような、ネザミア(Nethermere)の森の精を思わせる人物として登場する。ところが物語の途中でロレンスがアナブルを不慮の事故で死なせていることを考えるならば、ロレンスはイギリスの自然にはもはや、かつてワーズワスが見出したような神を認めることができず、さらにロレンスが自然の中に見出した神は、人間を神格化するようなロマン主義的な神ではないということではないだろうか。ではロレンスが自然の中に見出した神とはどのような神なのだろうか。

本稿では、ロレンスが独自の神、すなわち「闇の神」(the “dark god”)をはじめて提唱したオーストラリアを舞台にした『カンガルー』(*Kangaroo*, 1923)と『ユーカリ林の少年』⁴(*The Boy in the Bush*, 1924)の2作品のうち、後者を取り上げる。人間が真に充足した生を営むことができる理想的社会を夢見、ロレンスは1922年、イギリスを去った。新天地アメリカに向かう途中思いがけず立ち寄り滞在することになったオーストラリアにおいて、彼はその大陸の自然を象徴するユーカリ林——これまで慣れ親しんだイギリスの田園とはまるで異なる風景——を目の当たりにした時、オーストラリア大陸固有の地霊を敏感に察知し、「闇の神」を提唱することになる。ロレンスにとってオーストラリアでの自然体験がどのような意義を持つものであったのかを明らかにし、ロレンス独自の神についての一考察を試みたい。

2. ジャックの少年時代の背景——ケイティのモラル

『ユーカリ林の少年』はロレンスにとっての唯一のアクションドラマ⁵であり、冒険に満ちたこの小説のプロットを中心は、1880年代西オーストラリアの奥地^{アウトバック}での様々な経験を通して得られるジャック・グラント(Jack Grant)の精神的成長におかされている。物語の冒頭で、語り手によってジャックは「生まれながらの罪人、カイン」⁶であると言われ、彼特有の反抗的な性質が強調されている。なぜ彼は「生まれながらのカイン」なのだろうか。

イギリス国軍の士官であるジャックの父、グラント将軍(the General Grant)は「彼をおいてイギリス紳士のお手本はいない」(11)と言われるまでの立派な人で、ジャックはいつも叔母から「お父さんのようになりなさい」(11)と厳しく説教された。しかし彼には最初からそうなれないことがわかっていたし、なりたくもなかった。ところが、ジャックが因襲的な社会で「よい子」と認められず「カイン」と呼ばれるからといって、それは彼が単に反道徳的であることを意味するのではないようだ。次の引用文を見てみよう。

But anger! A deep, fathomless well-head of slowly-moving, invisible fire. Somewhere in his consciousness he was aware of it. And in this awareness it was as if he belonged to a race apart. He never felt identified with the great humanity. He belonged to a race apart, like the race of Cain. This he had always known. [. . .]

It was the anger, the deep, burning *life-anger* which was the kinship. Not a deathly, pale, nervous anger. (193)

ジャックの魂の深奥から沸き立つ怒り、反逆精神は、彼の生命と密着したものであることは上の引用文からも明らかである。厳しい道徳感が残存し、社会の根底にはキリスト教的宗教観や価値観が底流する抑圧的なヴィクトリア朝イギリス社会においては、ジャックにとって自分の中に湧きたぎる生命力を発散させることは容易なことではなかったが、だからといって、彼は父や叔母たちと価値観を共有することはできなかった。なぜならイギリス社会が享受した価値観を受け入れるということは、ジャックにとっては自分が「飼馴らされる」ことであり、それはすなわち悪になることを意味したからである。つまり次のようである。

He saw the fight his boyhood had been, against his aunts, and school, and

college. He didn't want to be made quite tame, and they had wanted to tame him, like all the rest. His father was a good man and a good soldier: but a tame one. He himself was not a soldier, nor even a good man. But also he was not tame. Not a tame dog, like all the rest.

[...] For tame dogs are far more vicious than wild ones. (306)

生きることの本質に忠実であるがゆえに父や叔母たちと価値観の転倒をきたし、「カイン」と呼ばれるジャックではあるが、彼がイギリスの価値観を受け入れることがすなわち「飼馴らされる」ことであり、「飼馴らされる」ことは悪であると認識するのは、ジャックにはジャック特有のモラルがあったからである。そのモラルはジャックがオーストラリア農家出身の母ケイティ(Katie Reid Grant)から受け継いだものであった。「生まれながらのカイン」と呼ばれるジャックの性格形成にはオーストラリア人の母が大きく関わっている。ケイティの特性を探ることがジャックという人物を理解することへと繋がっていくのではないだろうか。ここで、ケイティとはどのような人物なのかを考察してみよう。

ケイティはオーストラリアの「かわいい野生の動物」(12)を思わせる女性で、温厚でいつも笑みを絶やすことなく浚刺と人生を生きていた。彼女は円熟して肉付きもよく堂々とし、やわらかで温かい色彩を帯びたオーストラリアの女性で、無造作な態度にはどこもなくユーモアがあり、優しさと善良さが秘められていた。ケイティはイギリスにおいても植民地の住人であり続け、イギリスに閉じ込められることには耐えられず、イギリスの植民地を指揮するためにどこかの植民地に駐屯しなければならなかった夫に従い、世界中に住んだ。ケイティはいつもジャックをイギリスに残して行かなければならず、二人が共に暮らすことはほとんどなかったものの、それでもジャックは母ケイティの与えてくれる暖かな喜びを愛したのだった。(11)

このようなケイティの息子への接し方は、『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913)におけるガートルード(Gertrude Morel)の息子に対する接し方とは異なっている。中流階級出身のガートルードは自分の価値観を炭坑で働く夫に押し付け生活態度を矯正させようとする。ところが、それが適わず夫に幻滅すると、今度は自分の息子ウィリアム(William)とポール(Paul)に中流階級の仲間入りをさせようとし、彼らの意に反して淑女との恋愛を望んだ。このような母親による心理的束縛を受けた彼らは、社会的には中流階級の仲間入りを果たしながらも、女性との関係においては挫折する。つまり、ロレンスはガートルードを通して、良妻賢母というヴィクトリア朝イ

ギリス社会における典型的な女性像と、そしてそのような女性のあり方がもたらす悲劇的末路を示唆している。ところが、イギリスの女性には見出すことのできない快活さを秘めた開放的なオーストラリア人女性のケイティには、自分の価値観を一方的に夫や息子に押し付けるような独善性を見出すことはできない。しかし、最終的にジャックがユーカリ林という文明とは対照的な非社会的空間の中での生き方に共鳴し、順応することを考慮するならば、ガートルードが自分の夫や息子達に押し付けた「母親文化」⁷とは異なる、ケイティ独自の「母親文化」がジャックへと暗黙の内に伝えられているということになる。なぜなら、ジャックが「生まれながらにして有罪を宣告された罪人」(10)であることの根拠は、彼がケイティの「神秘的なオーストラリアの血を受け継いだ」(10)ということであるからだ。

ケイティからジャックへと受け継がれた「神秘的なオーストラリアの血」は、人間の中の自然性へと結びつくものであり、そしてその自然性は、ケイティを生み育んだオーストラリアの自然、すなわちユーカリ林へと繋がるものだと考えられる。イギリスの社会習慣の「柵」を容易に無視するケイティには、ユーカリ林特有のモラルがあった。そのモラルはケイティの次の言葉に集約される。

“My dear, there’s tame innocence and wild innocence, and tame devils and wild devils, and tame morality and wild morality. Let’s camp in the bush and be good.” (12)

イギリスにおける社会的因襲、あるいは社会的価値観が人間の本性に添わないものであり、人間の自由にとっての「壁に囲まれた牢獄」⁸であると認識していたロレンスにとって、生まれて初めて目の当たりにしたオーストラリア西部のユーカリ林の野生は、荒々しくとも、むしろ荒々しいがゆえに人間の中の自然性に率直に結びつくものであることを直覚したのではないだろうか。開拓され飼馴らされた文明社会の側にそれなりの道徳があるように、未開の野生の中にはそれ相応のモラルがある。次の引用文を見てみよう。

Which non-moral bush had a devil in it. [. . .] But a wild and comprehensible devil, like bush-rangers who did brutal and lawless thing. Whereas the tame devil of the settlements, drunkenness and greediness and foolish pride, he was more scaring. (12)

道徳に照らせば悪であり罪となる狂暴な無法者の行いも、「道徳を介さない」ユーカリ林の中では、自己の生き方に忠実な人生态度であり、うそ偽りのない人間行

動の発露とみなされ、したがって「乱暴でありながらも理解可能な悪」となる。そうであるならば逆にユーカリ林のモラルに照らしてみれば、道徳に照らせば善となるのが、虚飾にまみれた偽善的なものということになるのではないだろうか。「ユーカリ林でキャンプをしましょう、そして善良になりましょう」というケイティの言葉が意味するのは、ロレンスがユーカリ林の野生の中に見出した人間の真実に結びつくモラルであると考えられる。イギリスという旧世界が、オーストラリアという新世界に最初に運び込んだものが旧世界の罪であり、最初の船荷が囚人であったという歴史的事実をケイティより聞かされた時、ジャックは囚人達にある種の共感を感じた。(10) そしてジャックが自分を囚人になぞらえ、やがて自分は「生まれながらの罪人、カイン」だと思いういたる意識の背後には、ユーカリ林のモラルに関わるケイティの「母親文化」があった。ガートルードの「母親文化」が息子たちを心理的に束縛するのは対照的に、ケイティのそれは、ジャックに、その成長にともなう血のたぎりを存分に発揮させるものであった。しかし、ケイティのモラルを受け継いだジャックがそのモラルに忠実に生きるためには、彼はイギリスを離れなければならなかったのである。

3. ジャックとオーストラリア、そしてユーカリ林

キリスト教の神の理念に忠実に生きようとするならば、人間は自由に生きることにはできないと認識したロレンスは、その矛盾を解消し、人間を真に解放してくれる神の回復を望んだ。そこでロマン主義者たちと同様自然の中に神を見出したロレンスであるが、「宗教的信念から生じる深い内面の声に従うとき、人間は自由である」⁹という信念からも明らかのように、ロレンスにとって自然を見つめるということは、すなわち自己の内奥を見つめることであった。そしてその自己の内奥を見つめるという行為は、ロレンスにとっては、自らの中で溢れ出る生命の核を、そして肉体の最も深いところに根ざした人間の本質を認識する行為でもあったのである。つまり、ロレンスにとって自然が、人間の内奥と密接に結びつくものである以上、ロレンスが自然の中に見出した神もまた、人間の内奥に結びつくものでなければならないということになる。ところで、J.ワーゼン(John Worthen)は、オーストラリアはロレンスが独自の信仰を打ち出すのに格好の場所だったと述べる。¹⁰ オーストラリア独特の自然はロレンスにどのようなインスピレーションを与えたのだろうか。オーストラリアにおいてジャックはどのような体験をし、独自の信仰へいたるのかを見てみよう。

i. ワンドゥー

イギリスの農業学校を放校になった彼は、新しい生活を始めるためにケイティの母国であるオーストラリアへとやってきた。母方の親戚であるエリス家(the Ellis)と共に、彼はワンドゥー(Wandoo)という開拓地で農業生活を営むことになる。ジャックは、つねにエリス家の人々との「密接な、肉体的な結びつき」(58)を保ちながらワンドゥーでの農業生活を続けることで、イギリスにいた頃には感じたことのない家族というものへの強い愛着を、エリス家の人々に対して抱くようになる。そしてエリス家と共に営む生活の中で、ジャックがひととき強いインパクトを受けたのが、エリス家に「裁きの神」(69)のごとく君臨するグラン・エリス(Gran Ellis)であった。ジャックにはグランが「エリス家の神的支柱」(60)であると思われた。義足をつけ、めったに人前に姿をあらわすことのないこの老婆は、ジャックに次のように言う。

“[. . .]—Y’ll be tempted to sin, but y’ won’t be tempted to condemn. And never you mind. Trust yourself, Jack Grant. *Earn a good opinion of yourself*, and never mind other folks. You’ve only got to live once. You know when your spirit glows—trust that. That’s *you!* That’s the spirit of God in you. Trust in that, and you’ll never grow old. If you knuckle under, you’ll grow old.” [. . .] “God is y’rself. Or put it the other way if you like: y’rself is God. So win a good opinion of yourself, and watch the glow inside you.” (77)

このようなグランの信条は、人間の感情を、人間の個別性あるいは意志を強調することで、究極的に人間の心に神を見出そうとしたロマン主義者たちの特徴に繋がるものではないだろうか。「あなた自身が神なの」という言葉は、人間の神格化に繋がるものである。片足切断という不運に見舞われながらも、開拓者としての人生を生き抜いたグランにとって、確固たる自己を持つことが究極的に自らを神格化することへと繋がったと考えられる。しかし、かつてケイティが語った言葉でもある「自分の中に輝く光を信じなさい」という言葉は、のちにジャックの人生にとって重要な意義を持つことになるが、ジャックは「あなた自身が神なの」というグランの信条を受け入れることができなかった。ジャックは自分にとっての神について、ある夜、次のようなことを考える。

[. . .] it all seemed a mystery to him. The God he called on was a dark, almost fearful mystery. The life he had to live was a kind of doom. The choice he had was no choice. "Yourself is God." It wasn't true. There was a terrible God somewhere else. And nothing else than this. Because, inside himself, he was alone, without father or mother or place or people. Just a separate living thing. And he could not choose his doom of living nor his dying. Somewhere outside himself was a terrible God who decreed. He was afraid of the thicket of life in which he found himself like a solitary, strange animal. He would have to find his way through: all the way to death. But what sort of way? What sort of life? What sort of life between him and death? He didn't know. He only knew that something must be. That he was in a strange bush, and by himself. And that he must find his way through. (83)

重傷を負い、エリス家に担ぎ込まれたハーバート(Herbert)の看病をしながら、生死の境をさ迷うハーバートを見つめ、ジャックは人間にとって死が避けられないものであることを認識する。ジャックにとって神は暗い恐るべき神秘、人間を超えたところで人間の生死あるいは宿命を決してくれるものでなければならないのである。

やがてジャックはワンドゥーを離れ未開の奥地や北西部へと踏み込んでいくが、親しく交わることのできる神をユーカリ林の中で感得し、独自の信仰へとたどり着くことになる。

ii. ユーカリ林

ワンドゥーでの暮らしは、ジャックにとって、ユーカリ林に順応するために必要不可欠な知恵を身につけ、怪我人を看病しながら死の闇を認識したという意味でそれなりに有意義なものではあった。しかし開拓地である以上は、ジャックが超えなければならない「柵」の内側の世界にすぎなかった。グランの言う神も、キリスト教的な人格神と同様ジャックには受け入れられないものだった。

ジャックがはじめてユーカリ林に踏み込んだ時、この世のものとは思えない、時空を超えた沈黙とその超然としたユーカリの木々に、これまでに感じたことのない強烈な印象を受ける。ユーカリ林を考えただけで、自分の父も父の世界も、そして父の神々も、みな塵と化してしまった。(94) 自分の父の神々よりも、はる

かに巨大でもの言わぬ神がいる、ジャックにはそう思われた。

まもなく、ジャックはその神の「力強い肉体的な力」(176)を直に感じ取る経験をする。それは巨大で獐猛で飼いならされていない太陽、白いデーモンのような月、暗黒の夜空に光輝く星の三つの光輝を目の当たりにした時のことである。この光輝に照らされたジャックは燃えるような肉体の力を感じ、さらに自らがユーカリ林の自然の生命の循環の中に組み込まれていくのを感じ(173-76)、そしてジャックはユーカリ林の神を次のように認識する。

[. . .] in the wild bush, God seemed another god. God seemed absolutely another god, vaster, more calm and more deeply, sensually potent. And this was profound satisfaction. To find another, more terrible, but also more deeply-fulfilling god stirring subtly in the uncontaminated air about one. A dread god. But a great god, greater than any known. The sense of greatness, vastness, and newness, in the air. And the strange, dusky-grey, eucalyptus-smelling sense of depth, strange depth in the air, as of a great deep well of potency which life had not yet tapped. Something which lay in a man's blood as well- and in a woman's blood—[. . .]—in the Australian blood. (227-28)

しかしながら、キリスト教の神よりもずっと巨大で恐ろしく、肉体的な力を秘め、しかもオーストラリアの血の中に存在するというユーカリ林の神と、ジャックがより密接に触れ合うようになるには、乗り越えなければならない試練があった。その試練は、これから2年後、彼がいったん北西部を離れワンドゥーに帰ってきた時に訪れる。

恋敵イース(Red Easu Ellis)を殺害した後、ジャックは泉を探してユーカリ林の中をさ迷い歩く。正当防衛であるイース殺害を、ジャックは、イースはオーストラリアの土壌を肥やすために大地にかえったのだ、だから自分は最高によいことをしたのだ、という独自のモラルでユーカリ林の神の下に殺害を正当化する。そしてイースのものか自分のものかわからないジャックの手についた血を、ジャックとジャックの神秘の神とを永遠につなぐものとして、語り手(ロレンス)は彼に次のように言わせている。「僕は手を血に染めてしまった。これでいい。この血を僕(と僕の神と)の契約にしてください。」(283) 泉を求めてさ迷ううちに疲労困憊し意識朦朧となったジャックであったが、仲間によって救出され、蘇生する。

[. . .] he, Jack, was dark-anointed and sent back. (292)

額に黒い油を塗られたジャックは、子どもっぽさも抜け去り、不屈の精神の備わった完全な大人の男として蘇ることになる。

It was his eyes that had changed most. From being the warm, emotional dark blue eyes of a boy, they had become impenetrable, and had a certain fixity. There was a touch of death in them a little of the fixity and changelessness of death. And with this, a peculiar power. As if he had lost his softness in the otherworld of death and brought back instead some of the relentless power that belongs there.

[. . .] Some strange Lord had forged his bones in the dark smithy where the dead and the unborn came and went. And this was his only permanent contact: the contact with the Lord who had forged his bones, and put a dark heart in the midst. (295-96)

このような臨死体験にも似たユーカリ林での体験で、ジャックは死せずして死の闇を体験した。ジャックの中の「表層的なもの」(“softness”)は失われ、死と今が生まれざるものたちの行き交う「闇の鍛冶屋」(“the dark smithy”)が織り成す、自分自身の内奥にある「実在の自我」(“the living bone”)をしかと身につけ、ジャックは蘇り、彼の生命全体が再生したと理解したい。そしてこのような、自然、すなわち聖なる宇宙との結びつきの中に、人間の真の実在を求めようとするロレンスの姿勢は、C. クラークによれば、完全にロマン主義の系譜に含まれる¹¹ものということである。

そしてジャックは生と死はひとつのものの両面であり、ユーカリ林の中で感得した神がすなわち「死の神」であることを次のように認識する。

The two are never separate, life and death. And in the vast dark kingdom of the afterwards, the Lord of Death is Lord of Life, and the God of Life and Creation is Lord of Death.

But Jack knew his Lord as the Lord of Death. The rich, dark mystery of death which lies ahead, and the dark sumptuousness of the halls of death. Unless Life moves on to the beauty of the darkness of death, there is no life, there is only automatism. Unless we see the dark splendour of death ahead, and travel to be lord

of darkness at last, peers in the realms of death, our life is nothing but a petulant, pitiful backing, like a frightened horse, back, back to the stable, the manger, the cradle. But onward ahead is the great porch of the entry into death, with its columns of bone-ivory. And beyond the porch is the heart of darkness, where the lords of death arrive home out of the vulgarity of life, into their own dark and silent domains, lordly, ruling the incipience of life. (296-97)

人間の生命は闇の中で創造され、闇の中で消滅する。闇の中における生命の初めと終わりの一切を統括する「死の神」こそが、ジャックは自分にとっての真実の神であることを認めることができた。さらに「死の神」が、暗く、それはあたかも星が輝く漆黒の夜空のように暗く、「深く力強い感情を内に秘め」(285)、「見苦しく肥大化した白人達」(285)、すなわち「飼馴らされた」者たちの「終焉をじっと待っている」(285) 獐猛な神であることを見逃してはならない。「静まり返った、ユーカリの木々の散在する、復讐心に満ちた」(285) ユーカリ林に棲む神は、その神を認めない者には恐怖を抱かせる恐るべき神なのである。その恐るべき「死の神」を、ジャックはユーカリ林の中に迷い込み、死の闇を苦しみ乗り越えることで「実在の自我」を身につけ、蘇ることによって、「表層的な」生命の終焉を告知する神でありながら、新たなる生命の神でもあることを認知したということではないだろうか。そしてジャックは金鉱を掘るため再び北西部へ向かう。金鉱を掘り当て金を手にした時、ジャックは自分の中の「白い神」が萎え、闇の中で生命の誕生を支配する「死の神」の新しい生命の流れを直に感じる事ができた。

“I must open the veins of the earth and bleed the power of gold into my own veins, for the fulfilling of the aristocrats of the bone. I must bring the great stream of gold flowing in another direction, away from the veins of the tame ones, into the veins of the lords of death.” (308)

この金は以前ジャックがユーカリ林の中で照らされた太陽と月と星の三つの光輝につながるものだと考えたい。空から照らされた光を、今度は手で直に触れることができたということではないだろうか。そしてこのように見てくると、さらに次のように言えるのではないか。それはつまり、その流れに溶け込み一体化しなければ感得できない神の棲むオーストラリアの自然、すなわちユーカリ林とその赤い大地は、ジャックが踏み込まなければならない外的世界であると同時に、ジ

ジャックにとっての内的世界でもあったと考えられるのである。

ロレンスはオーストラリアを人間の意識の「柵」を超えた世界としてとらえていた。

You have moved outside the pale, the pale of civilisation, the pale of the general human consciousness. The human consciousness is a definitely limited thing, even on the face of the earth. You can move into regions outside of it. As in Australia. The broadcasting of the vast human consciousness can't get you. You are beyond. And since the call can't get you, the answer begins to die down inside yourself, you don't respond any more. You don't respond, and you don't correspond. (230)

ユーカリ林は意識の「柵」を超えた世界としてのオーストラリアを象徴する。ある者にとってはオーストラリア独特の過酷な自然環境を象徴し、その中に入ると簡単に迷い込み命を落とすことになりかねない死の場所を連想させるユーカリ林だとしても、ジャックはそこに自分だけの神を認めることができた。つまりユーカリ林は、意識の限界を超えた闇へとつながるところであり、したがってジャックによってそこに認められた「死の神」は、直感によってのみ感得できる不可視の闇の神である。ロレンスにとって闇は無意識あるいは死の世界を象徴すると同時に、それは豊饒な大地の深淵へとつながるものである。闇の中では生と死は一体である。このような闇の中の神をジャックはユーカリ林の自然の流れと一体化することで感得することができた。その神はジャックを堅苦しい社会の束縛から解放し、生きることの本質に忠実であらしめ、したがってその神の棲むユーカリ林の中でのみジャックは自分の存在意義を見出すことができた。それは自分の父に象徴される意識の世界の中では決して見出すことのできなかつたものである。物語の最終場面で、ジャックはヒルダ(Hilda Blessington)とクリスマスに再会することを約束し、愛馬アダム(Adam)に乗ってユーカリ林の中へと消えていく。このヒルダという女性は、ジャック独自のモラル、すなわち真実の自我を完成させるにはこの大地に根をはらなければならない、その根を完璧に保つためにはひとつの根では足りない、妻モニカ(Monica Ellis)一人だけでは不十分である、豊かな生命の流れをたたえた「マトリックス」(“matrix”)としての女性ももう一人必要だ、したがって自分はもう一人妻を娶らねばならない、という理由で一夫多妻制を容認するモラルに興味を持ち、自らジャックと共にユーカリ林へ旅立つことを申し出る。ジャックはヒルダについて次のように思う。

Slowly he formed a dim idea of her precise life, with a rather tyrannous father who was fond of her in the wrong way, and brothers who had bullied her and jeered at her for her odd ways and appearance, and her slight deafness. The governess who had miseducated her, the loneliness of the life in London, the aristocratic but rather vindictive society in England, which had persecuted her in a small way, because she was one of the odd, border-line people who don't, and can't, really belong. She kept an odd, bright, amusing spark of revenge twinkling in her all the time. She felt that with Jack she could kindle her spark of revenge into a natural sun. And without any compunction, she came to tell him.

He was tremendously amused. She was a new thing to him. She was one who knew the world, and society, better than he did, and her hatred of it was purer, more twinkling, more relentless in a quiet way. Her way was absolutely relentless, and absolutely quiet. She had gone further along that line than himself. And her fearlessness was of a queer, uncanny quality, hardly human. She was a real borderline being. (346-47)

ジャックは自分と同質の怒り、反逆精神を、イギリスの価値観に飼馴らされることのなかった「辺境地の女」であるヒルダの中に認めた。つまりジャックには、ヒルダの深奥から湧き出る暗い生命の流れが妻モニカのと異なる「新しい」流れであると思われ、その「新しい」流れは自分の生命を成就させるためには必要なものであると直感したということではないだろうか。このような一夫多妻制を容認するモラルからは、「闇の神」の下では、文明社会における道徳的な善悪よりも、自然と一体化することで可能となる自己の生命の成就を重視する、ロレンスの自然と生命の哲学を読み取ることができる。ジャックはこのような女性と共に自分にとって真実であると思える生活の場を求め、アダムに乗ってユーカリ林の中を駆け抜けて行くのであった。

4. 結 び

限りない自由を求め、既成の社会的因襲に反抗し、理想の夢を徹底的に追求しようとするロマン主義者たちの特性¹²に照らして考えるならば、たしかにジャックはロマン主義的人物だといえる。しかし、ジャックにとって神は、まず自身

が自然に同化されることではじめて感得できる不可視の闇の神であって、例えばルソー(Jean-Jacques Rousseau)が、良心が人間を神のようにしてくれる¹³というような、人間をそのまま神格化するようなものとは次元が異なるのではないだろうか。同じ自然の中だとはいえ、ワーズワスがイギリスのどかな森の中に、あるいは樹木に神を見出したのに対し、ロレンスはイギリスでは決して体験することのなかったオーストラリア独特の巨大で獷猛で「飼いならされていない」太陽、月、星、そしてユーカリ林の中に神を見出した。その神は「自己破壊」をした者が自然の生命の流れと一体化しながら「血の本質」¹⁴の次元でのみ感得できる神なのである。「血の本質」とは、ロマン主義者たちが踏み込むことのなかった人間の中の自然性、人間そのものの本質を意味する。ロマンティシズム、とりわけワーズワスの汎神論とキーツの「自己破壊」の理念をもとに、生命哲学をより肉体的な生命を重視するものとして発展させ、ロレンスはこれまで生命の源として模索していた「闇」の本質を見極めることができた。そしてオーストラリア大陸での様々な自然体験を通して、その闇の中に神を見出すことができた結論づけられよう。

注

- 1 朝日千尺『D. H. ロレンスとオーストラリア』(研究社, 1993), 104. *The Boy in the Bush* は『D. H. ロレンスとオーストラリア』において、朝日氏によって初めてこの日本語タイトルに訳された。
- 2 Colin Clark, *River of Dissolution: D. H. Lawrence and English Romantics* (London: Routledge and Kegan Paul, 1969), 3.
- 3 フィリップ・P. ウィーナー編著『西洋思想大事典第4巻』(平凡社, 1990), 636.
- 4 『ユーカリ林の少年』は M.L. スキナーの「エリス家の人々」をロレンスが改作し、1924 年に出版された。スキナーとの共同作品であるとはいえ、最後の 2 章は完全にロレンスによって書かれたのであり、ロレンス独自の価値観や倫理観が存分に発揮されていることなどから、P. エガートは『ユーカリ林の少年』をロレンスの作品として論じることに差し支えないと指摘している。本稿においても、『ユーカリ林の少年』をロレンスの作品として論じることにする。
- 5 Harry T. Moore, *The Intelligent Heart: the Story of D. H. Lawrence* (London: William Heinemann, 1955), 321.
- 6 D. H. Lawrence and M. L. Skinner, *The Boy in the Bush* (Harmondsworth: Penguin Books, 1996 [1924]), 10. 今後同書からの引用は文のあとに頁数のみを印す。
- 7 朝日千尺『D. H. ロレンスのフェミニズムを読む』(英宝社, 2000) 朝日氏は子どもの成長過程において、母親が一方的に自分の価値観を子どもに押し付ける独善性を「母親文化」と定義づけている。

- 8 D. H. Lawrence, *Study of Thomas Hardy and Other Essays*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1985 [1936]), 21.
- 9 D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (Harmondsworth: Penguin Books, 1977 [1923]), 12.
- 10 ジョン・ワーゼン「ジョン・ワーゼンによる D. H. ロレンス評伝」、ポール・ポブラウスキー編著『D. H. ロレンス事典』(鷹書房弓プレス, 2002), 50.
- 11 Colin Clark, x iv.
- 12 皆見昭 編『英詩の歴史』(昭和堂, 1989), 161.
- 13 ジャン=ジャック・ルソー「サヴォアの助任司祭の信仰告白」『エミール』中(岩波文庫, 1963 [1762]), 172.
- 14 Cf. *Studies in Classic American Literature*, 169.

The Private Mary Chesnut における女性たち

水本有紀

SYNOPSIS

The Private Mary Chesnut contains a detailed information of the Civil War, whose author, Mary Boykin Chesnut, was familiar with the workings of the Southern government.

Her diary had been known through several editions before the publication of *The Private Mary Chesnut*.¹ Many of her secrets are exposed in this book, and other unknown aspects of the Civil War should be discovered by reading it. The purpose of this paper is to examine Mary's views on women and attitudes to her diary from various points of view, mainly centering on her opinions about women.

Mary's views on women are similar to her views regarding the diary. To put it more concretely, she thinks that it is necessary for both women and literary works to depict the true nature of human being. Mary tries to describe the reality surrounding women, and shows that various different viewpoints can relate to the same set of historical facts.

はじめに

The Private Mary Chesnut は、アメリカ南部女性 Mary Boykin Chesnut によって書かれた南北戦争時代の日記であり、数ある南北戦争に関する作品の中でも、当時の南部政府の内幕に通じた詳しい内容で構成されている。というのも、Mary は南部政府における中心的役割を果たした人物の夫人であったため、Davis 大統領などの南部の重要人物達と交際し、政府の内情に詳しくあったからである。では、その Mary Chesnut とはどのような人物だったのか。本論に入る前に、作者である Mary の人物像を簡潔に紹介したい。

Mary は、1823 年 3 月 31 日、South Carolina 州 Statesburg で生まれる。大規模なコットンプランテーションの所有者で、また上院議員でもあった父親を持ち、政治色の強い家庭で育った。12 歳の時に通い始めた Charleston の Madame Talvande's French School for Young Ladies で、文学に関する議論、音楽や映画を鑑賞する楽しみ、読書などに代表される Mary の教養の深さや人

生観が培われる。その後、17歳の時に James Chesnut と結婚をするが、James の上院議員当選がきっかけとなり、Mary は政治的問題に対して更に関心を持つようになる。しかし、1860年秋の Lincoln の大統領当選に引き続き、南北間で対立が起こり、James は上院議員を辞職して South Carolina に戻る。その頃の夫を取り巻くさまざまな政治的問題を記録するために日記をつけ始めたことが、Mary が日記をつけていく最大の動機となる。こうして南北戦争が勃発する直前に Mary の日記もその歴史を刻み始める。

1870年代は、Mary は戦時中につけてきた日記をもとに小説をつくるため、その原稿づくりに専念していく。1881年から1884年にかけて原稿づくりは完成するが、その出版を見届けることなく、Mary は1886年11月22日にその生涯を閉じた。Mary の人生はまさに激動の時代とともに導かれたものであり、その60余年の生涯の中で、特に南北戦争時代に感じた様々な思いがこの日記に詰め込まれている。

戦時という混乱した時期に、じっくり言葉を選んで日記を書くというのは不可能に近いことであり、実際、Mary も要点しか書くことができない日々もあった。しかし、このような状況で書かれた日記だからこそ、Mary の思いがより率直に表現されているはずである。そのことに注意しながら、本稿では *The Private Mary Chesnut* に関して、Mary の女性観及び日記・文学観の二点から論じることにする。

1. Mary にとって真の女性とは

Mary Boykin Chesnut は、南部主要人物の妻という立場、そして Mary 自身の愛情溢れる魅力によって、至る所で歓迎された。Mary の周りには常に多くの女性が集まり、女性に対する記述には Mary 独自の女性観が表れている。ここでは、Mary と一世代前の女性との比較に重点を置き、Mary の思い描く真の女性とは何であったかを考察していきたい。

Mary の義母 Mrs. Chesnut は、自我を抑制し、大胆に行動せず、苦悩を表に出さないという伝統的な理想的南部女性を体現した女性であった。そのような義母は“something of a paradox, a woman who had undergone tremendous suffering, sustained by a seemingly iron will”² という、複雑な人物像として Mary の目に映った。Mary は義母の旧弊な考え方と自分の考えの違いを鮮明にし、改めて女性観を見つめ直している。特に、結婚における女性の立場についての見解に

Mary の女性観が凝縮されている。 “[. . .] this is not worse than the willing sale most women make of themselves in marriage [. . .] nor can the consequences be worse. The Bible authorizes marriage & slavery [. . .] poor women! Poor slaves!” (March 4, 1861, 21)³ ある日、奴隷の売買をふと目にした Mary は、その悲惨な光景を目の当たりにし愕然とする。ここで Mary は、奴隷制度と結婚制度の実情を同一視する。当時は家庭への献身と従属が女性の美德とされており、そのような時代背景において Mary は真の女性とは何かを絶えず自問自答している。慎ましき、善良さ、自己犠牲でもって男性に喜ばれるのは、真の女性ではない。そう思いつつも、Mary 自身も伝統的な南部女性の殻を破ることがなかなかできない女性の一人であった。しかし、“rose-colored glasses”⁴ で世の中を見る傾向がある義母と唯一違うのは、そのような女性像が理想とされる一方で、女性につきつけられた現実を見据えていたことである。その違いは出産における両者の女性観にもみられる。子供を産んでいない Mary と、生涯 14 人もの子供を産み育てた義母との間での意見の相違が生じている。

Mrs. Chesnut was bragging to me with exquisite taste—me a childless wretch, of her twenty seven grandchildren, & Col. Chesnut, a man who rarely wounds me, said to her, “You have not been a *useless* woman in this world” because she had so many children. & what of me! (March 21, 1861, 44-5)

Mary の義父の言葉によれば、義母はたくさんの子供を産んだので“useless”ではないということである。つまり、出産がまるで女性が持つ唯一の能力であるかのように述べており、それに対して義母は疑問すら持たず、Mary にとって皮肉ともいえるほど自慢している。子供を産んでいない Mary は“useless woman”ではなく、女性の価値というのは、子供を何人産んだかということによって決められるものではない。それに何の疑問を持たない義母を育ててきた時代の矛盾について、Mary の悲しみと怒りは増していく。そして、Mary は、これからは女性の価値が出産にあるという偏見を取り除かなければならないとも考えている。

Mary は、義母との話題において、当時の社会の偏狭な見方しかしない盲目的な局面を再確認する。たとえば、それぞれの出来事には、それに至る多面的な経緯や原因がある。それを度外視し、狭隘な基準で判断するのは誤りではないか。次に示す文章で Mary は Charlotte Villepigue という女性の婚外

出産という話題を取り上げ、これに対する義母と Mary 自身の意見との相違を明確に示している。

My virtue was rewarded by having a long discourse on the subject of Charlotte Villepigue. I was asked if she had any more children. Said, “*One more.*” Was she married? “No.” Was she [a] *bad girl*? I said, “Yes,” & was answered, “poor thing,” may be she was not, &c, &c. Now I really feel like a fool. When I was young I was taught that an unchaste woman was a bad one. I believe from what I see & hear daily that is an old & vulgar prejudice rapidly dying out. (September 29, 1861, 165)

“The best & purest of women” (September 30, 1861, 165) の一人であった義母は、婚外出産をしているという理由だけで Charlotte を“*bad girl*”だと決め付けている。つまり義母は純潔で貞淑なことが“*good woman*”の条件だと考えているわけである。実際 Mary 自身も、不貞な女性は“*bad woman*”だと教えられて育った。しかし、成長し大人になってからは、必ずしもそうでないことを知り、この件において Mary は Charlotte のことを単に“*a poor delicate creature*” (September 30, 1861, 165) なのだと弁護している。ここで注目したいのは、Mary が婚外出産自体を悪いことではないと考えているのではなく、その背景をきちんと知らない内に“*bad girl*”と決めてしまうことに問題があると考えている点である。つまり、Mary は昔ながらの因習や偏見によって事柄を見るのではなく、あくまでも自分の目と耳で受け取ったものを信じるのが最も大切だと言いたいのである。

Mary は、女性同士の会話や、身近に起きたエピソードを通して、時には冷静に、時には感情的に女性の直面している問題を取り上げている。義母を始めとする多くの女性達が与えてくれる情報は、戦争の見えない舞台を中心に捉えて世の中を見る Mary にとって貴重なものであった。表舞台に立つ男性達を通して見た世界と比べて、女性の目を通して見た世界には、歴史の中の隠れた力が存在している。Mary は、独自の修辞法を巧みに使い、真の女性とは何かを我々に訴えている。Mary の考える真の女性は、自己の中にある事実に忠実に生き、偏見や慣習でなく、独自の価値判断によって善悪を決めるべき女性なのである。

2. 女性として、人間として

ここでは、男性に対する女性という存在、そして戦時という混沌とした時代における人間の存在について検討していきたい。「男性対女性」という図式は、極論になりかねないという懸念があるが、ここでは人間全体を考える上で二極化された存在として論じていく。

Mary の生きた時代よりも一世紀前の独立革命の時代には、政治的危機や軍事的衝突が起こると、公的な場には無関心だった女性も政治的な思想や会話に巻き込まれるようになった。そして 1760 年代になると、女性の日記や手紙にも政治に関する事柄が見られるようになる。しかし、当時はまだ、女性が政治の話題に介入することは無節操なことだと見なされていた。そして、その頃の政府は「公德心」とよばれる、男性的な自己犠牲と社会の為に尽くす精神を必要としていた。⁵ そうした政府の性質は、政治活動やその目的は男性のためのものだという考えをいっそう強めたのである。そして Mary の生きた 1860 年代も、女性が政治に介入する余地は未だになかった。しかし、Mary は、日記の中で愛国心や政治のことについて盛んに論じている。まず始めに、Mary の目を通して見た男性社会の中の、特に政治と戦争に対する女性のあり方を検討していきたい。

南北戦争のいわゆる「歴史」では、前線で活躍していた男性社会の様相しか目にはすることはできない。しかし、政治には直接的ではないにしろ間接的に女性が影響していた。政治にいかに関与したかを、次の事例が如実に物語っている。Davis 大統領と別の政治家の政治に対する意見の行き違いは、かつては親友であった彼らの夫人達の仲違いによって一層深刻になっていた。そこで、Mary は夫人達の仲を取り持つ。“They are so busy playing court here they forget the war altogether—these women!” (June 27, 1861, 86) 夫人達の不和は一見ささいなことだが、それが夫達の政治に響き、最終的には南部連邦の将来にも関わってくると Mary は確信していた。こういう事例を見れば、男性中心に作られた社会の裏には、女性達の様々な軋轢や奮闘があるということが分かる。更に政治に多大な関心を持っていた Mary は、著名な男性達と意見を交わしたりして政治の社会的側面を楽しんでもいた。しかし、Mary が求めつづけてきた “glory, honor, praise, &c, power” (August 29, 1861, 145)⁶ は女性である Mary にとっては手に入れられるものではなく、夫を通してしか得られなかった。そこで、Mary は夫を支援することで、その栄光を

勝ち得ようと決心する。その中でも夫の仕事のことや日常の出来事を日記につけるといことが夫への最大の支援でもあり、自分にとって最大の事業でもあったからである。

確かに、政治や戦場において、女性の直接的な意見は反映されなかったであろう。しかし、女性である Mary は、最前線で戦う男性より一歩離れていたからこそ、戦争の悲惨さを別の側面から見ることができた。それは、戦争と奴隷制度における人間の存在を考えさせられるものであった。次の文では、勝利に歓喜する一方で死者に哀悼の念を抱く人間の複雑さ、哀れさを嘆いている Mary の心境を見ることができる。“Such miserable wretches, so glad of the victory, so sad for the dead.” (July 22, 1861, 100) この簡潔な表現によって、Mary の複雑な心情が直接的に伝わってくる。更に、戦争という非常事態において、人間や社会の実態が露呈する。

That man Turner that I saw die in convulsions in Richmond is the son of Mrs. Turner that I used to help at the factory & I expect the very boy I sent to keep Henrietta's school. Now they are raising money to send his body home. They are too late—he died in filth & squalid want—his clothes unchanged—in an atmosphere of horror that made me faint. Oh the mockery & folly of this world—. (September 16, 1861, 155)

Mary と古くからの知人である Mrs. Turner の息子が亡くなり、遺体を家に帰還させるために募金活動をしている人々の情け深さと哀れさを、遺体への悲惨な待遇に対比させている。戦死してしまえば役に立たない、物同然の扱い方をする世の中の実状を思い知り、人間らしく扱われる大切さを感じている。そのような社会の矛盾は、貧富の差にも影響されていた。

There is an [sic] universal hue & cry. This one caused our failure—the other—here—there—every where. I say every man who failed to do his utter most aided—every man who could & did not fight caused it. I do not see that any did their duty but the dead heroes—the wounded & maimed—& those sturdy souls who first went into it—& were found at their post under arms when the *generals* gave them up to the Yankees. (May 16, 1865, 247)

戦争で実際に傷ついたり亡くなった人の南部への尽力こそ賞賛されるべきだが、そうでない上層部の人間が表彰されたり勲章を授かったりしているという点に Mary の鋭い目が向けられている。

アメリカ南部女性である Mary と夫の James にとって、奴隷制度は切っても切れない生活の一部だった。奴隷制の多くは罰則により秩序を保たれており、奴隷監督者(slave driver)は奴隷に罰を与える以外に役目をもたなかったほどである。こうした社会で育つ子供は、他人を支配する立場になった場合、物同然に人を扱う傾向を持つことがある。このように奴隷制が人の道徳観を腐敗させるという点に Mary は注目し、同じ人間として奴隷と接することを心掛けていた。また、奴隷をめぐる問題の一つに、奴隷制度廃止というスローガンを掲げていた北部による残酷な待遇が挙げられている。ある日、避難所に向いた Mary は、そこで多くの黒人の子供が置き去りにされているのを発見する。

We saw no end of little Negroes. At Aunt Sally Burwell's three little Negro babies were brought to her. She asked the man why he brought her so troublesome a gift. He said (he was a servant of her own), "Missis I only took *three*—nine were in the wagon. The Yankees left them." Surely the poor black mothers were forced to leave them [. . .]. The Yankees were done with them! There are not rumours but tales told me by the people who *see* it all. (May 10, 1865, 242)

南部の敗戦が迫り、北部連邦軍に追われることになったプランテーション経営者たちは、奴隷を連れて大陸の中心部や西部へ逃げていった。しかし、移動能力と労働価値の高い男性の奴隷が重宝され、女性とその子供は置き去りにされることが多々あった。その結果、路頭に迷った女性奴隷は飢えや病から身を守るため死闘するが、結局はどうしようもなく、生まれたばかりの乳呑児を捨てるしかなかった。そればかりか、邪魔になった女性奴隷は北軍によって刺殺されるということもあった。Mary は目撃者から聞いたという点を強調することによって、この話の真実性を訴え掛ける。戦争が引き起こした混沌状態によって奴隷が物同然、あるいはそれ以下に扱われることは日常茶飯事になり、戦争における人間の待遇と同様の結果をもたらした。

これらのことから、Mary Chesnut が男女、戦争、社会といった枠組みから人間を切り離し、人間の存在とは何であるか、どうあるべきかを模索してい

の様子が見える。そして男女間で差別し合い、幻想を抱き合い、あるいは戦争で傷つけ合う人間を、皆同じ源からきた同胞なのだと考え、社会制度に支配されている人間の存在を自然の一部として眺めようとする Mary の観察態度を垣間見ることができる。

3. Mary Chesnut の日記・文学観

当時の女性に与えられていた表現の自由に関する概念に基づき、Mary の日記について考えていきたい。Mary は、自分の日記について、また女性の「書く」行為について、どのような考えを持っていたのであろうか。

何よりも「率直に書くこと」に徹底したい Mary は、日記を人の目に触れさせようとしなかった。Mary は近くの学校や就寝時などの誰もいない場所で日記を書き続け、更に鍵をつけることで、誰にも、夫にさえも見せなかった。そうすることで率直な気持ちを書くことに徹底でき、非公開の記録を完成させた。これには、女性の自我がまだ本当に市民権を獲得していない時代であったという歴史的理由もあるだろう。しかし、日記をつけている間は誰にも見せなかったとしても、書物として残るからにはいずれは誰かの目にさらされることになる。実際、“We have risked all, & we must play our best for the stake is life or death. I shall regret that I had not kept a journal during the two past delightful & eventful years.” (February 18, 1861, 3) からは、Mary が様々な出来事に満ちた過去2年間を日記に残せなかったことを悔やんでいる様子が見える。それは、Mary が自分のためだけでなく、人の目に触れることを予期していたからではないだろうか。

ここで、日記という文学形式に焦点を当てて、Mary の日記を考察したい。日記の中で常に根本的なのは、著者がいつでも自分の言説の主体であり、同時に客体であるということである。日常で生活している Mary と、日記に思いを記している Mary は別の存在である。実際に Mary は、その二つの存在をはっきり認識しており、そのことは次の箇所でも明らかにされている。“What nonsense I write here—however, this journal is intended to be entirely objective. My subjective days are over. No more silent eating into my own heart—making my own misery when without these morbid phantasies I could be so happy—.” (March 11, 1861, 33) しかし、ここで問題になるのが Mary の “My subjective days are over.” という言葉である。Mary はこの日記は“objective”であると言っている

が、そのようなことは果たして可能であろうか。何故なら、Mary が日記に書くためにある事実を選び、取り上げるという行為だけを見ても、そこには Mary の主観が入っているからである。人がものを書く、見るという行為には主観が自ずと入ってしまう。だから、人間が事実にも忠実に物を書くに際して、それは完全に客観的になることはあり得ない。実際、Mary の日記を読んでいくと、これが日記であることを忘れさせるような修辞法、文学的操作を随所に見ることができる。Mary は Madame Talvande's French School で、文章の言葉をうまく使い、読者に感動を与える方法を学んだ。そして、家庭においては両親の人間に対する見方が Mary の人間描写の方法に影響を与えた。両親は人間を客観的に見る楽しみと重要性を Mary に教えたのである。更に Mary は実際に変化していく出来事を利用し、まるで小説を作り上げていくかのように完成させていった。そして、このことこそが Mary の日記が臨場感あふれ、読む者の心に響く理由である。ただ事実を連ねるだけでは表現できない現実性を、主観という一種の創造力によって生み出しているのである。もし主観なしの作品が可能であっても、それは極論すれば誰が書いても同じで独自性がない。言い換えれば、人間の主観が入るからこそ日記を始めとする作品は意義深いものになるのである。だから、Mary にとって“objective”に書くというのは、自分が本当だと信じることに率直に書くことを意味しているのだと考えられる。ありとあらゆる事実を観察し洞察することによって選び、そぎとって生まれるテーマを対象にするのがものを書くことの最大の意義であると Mary は考えている。

Mary は、人物の言動の変化を外側から捉えることを意識し、例えば戦争に影響された人間や社会を描き出している。Mary にとって日記という媒体を通して自ら語ることは、自分の見方や感じ方、考え方を確認することであった。だから、Mary が前述の引用で用いている“subjective”、“objective”という言葉は、主観と客観という対立する図式で捉えるものでなく、社会的慣習や常識との隔たりを表しているといえよう。つまり、Mary の“objective”とは、そういった枠組みにからめとられない視点のことであり、くもりのない目で物事を捉えることを指していると考えられるのではないだろうか。そしてこの態度には、日記という媒体に対する Mary の姿勢も表明されているといえよう。通常日記とは、自らを客体として主観的に書く行為であるが、Mary はその両者の隔たりを用いて、自らの視点から社会的慣習や常識といったくもりをおとして、社会に向かって意見や要求を提出しようとしたのである。

結 論

以上、日記に書かれた Mary Chesnut の思い、そして日記自体に対する Mary の姿勢を観察してきた。ここで大事なことは、それぞれの記述を見る際に、Mary が何故その出来事を取り上げたかという点である。一つの出来事が重要なのではなく、着目した出来事について語っている Mary の言葉自体が重要なのである。Mary は一見些細に見える「ほんの一瞬のこと」「日常のこと」を南北戦争の五年間に對置することによって、複雑な人間という存在を描写しようとした。Mary はそういった小さな出来事に焦点を当て、地位という虚飾を剥ぎ取った人間の素顔、人間に内在する事実を描き出していったのである。

そこで、Mary の女性観は、日記・文学観に通じるという結論に達する。というのは、日記を書く時に社会的慣習や常識に惑わされずに事実を重視すべきだという Mary の考え方は、女性への要求にも当てはまるからである。女性が社会的慣習ではなく自己の中にある事実に目を向け、それに忠実であるべきだと Mary は訴えている。更にその事実を女性の目で見たとときに生まれる思いについて語る事が重要だと考えているのである。Mary は事実がそれぞれの人の目を通る際に見えてくるそれぞれの思いに深い意義を見出していたにちがいない。要するに、Mary の日記の重要性はその情報ではなく、人々や出来事、あるいは戦時社会を通して生じる思いにあるといえよう。南北戦争についての事実は、至る所で見ることが出来る。しかし、当然のことではあるが、Mary Chesnut という女性の目を通すことによって生まれた南北戦争についての思いは、この日記でしか見られない。Mary は大きな歴史の流れと共に、それと並行して営まれている人々の小さな日常の歴史に目を向け、それぞれの間の微妙なずれをこの日記を通して描いているのである。Mary の日記の根底には、事実の多面性、つまり見る者の視点や立場によって千変万化する事実の性質が見られる。Mary があくまでも事実に忠実に作品を書くべきだと言った裏には、そうした人々の視点や立場を大切にすべきだという考えが存在しているのである。そして Mary の“*My subjective days are over.*”という言葉こそ、この日記の主題に他ならない。それは、厳密な言葉の意味上での「主観的日々の終わり」を指すのではなく、社会的慣習や常識にとらわれない客観性によって真実を見極めようとする姿勢である。そしてその視点は Mary の日記観のみならず、女性に対する視点にも共通するも

のであった。

読者が Mary の日記に対して示す反応は様々であろう。ある人にとっては今まで持っていた偏見から共感への変化でもあり、またある人にとってはその逆もある。しかし、確かなことは、それは新たな発見であることには変わりはなく、後に知識や思いやりといったものに昇華していくのである。Mary は女性を取り巻いている現実から決して目をそむけたりはしなかった。それは時に重荷として女性たちを悩ませたが、Mary は独自の修辞法でもっておおらかに書き上げた。The Private Mary Chesnut は南北戦争時代に生きた一人の女性の記録として後世の人達の間で語り継がれていくであろう。

注

本稿は、甲南英文学会第 18 回発表会（2002 年 7 月 6 日 於甲南大学）における口頭発表草稿を加筆訂正したものである。

- 1 Mary Boykin Chesnut の日記は、*The Private Mary Chesnut* の他に、次の 3 種類の形式で出版された。*A Diary From Dixie, as Written by Mary Chesnut* (New York: D. Appleton and Company, 1905)、*A Diary From Dixie by Mary Boykin Chesnut* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1949)、*Mary Chesnut's Civil War* (New Haven: Yale University Press, 1981) である。
- 2 Elisabeth Muhlenfeld, *Mary Boykin Chesnut: A Biography* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981), 48.
- 3 C. Vann Woodward and Elisabeth Muhlenfeld, eds., *The Private Mary Chesnut* (New York: Oxford University Press, 1984), 21. 以下、テキストの引用は本文中の括弧内に頁数を記す。また、日付も括弧内に示す。
- 4 *Mary Boykin Chesnut: A Biography*, 48.
- 5 『アメリカの女性の歴史：自由のために生まれて』によると、18 世紀末の独立革命の時代には、公徳心は virtue で、勇気・質素という男性的資質であり、その反対に vice は臆病・優雅という女性的資質と見なされていた。
- 6 “With men it is on to the field.—‘glory, honor, praise, &c, power’”(August 29, 1861, 145) という文脈からすると、“glory, honor, praise, &c, power”は少なくとも当時において男性のみが獲得できる栄光と認識されていた。

引証文献

- Evans, Sara M. *Born for Liberty: A History of Women in America*, 1989. 小樽山ルイ他訳. 『アメリカの女性の歴史：自由のために生まれて』明石書店, 1997.
- Martin, Isabella D., and Myrta Lockett Avery, eds. *A Diary From Dixie, as Written by Mary Chesnut*. New York: D. Appleton and Company, 1905.
- Muhlenfeld, Elisabeth. *Mary Boykin Chesnut: A Biography*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981.
- Williams, Ben Ames, ed. *A Diary From Dixie by Mary Boykin Chesnut*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1949.
- Woodward, C. Vann, ed. *Mary Chesnut's Civil War*. New Haven: Yale University Press, 1981.
- Woodward, C. Vann and Elisabeth Muhlenfeld, eds. *The Private Mary Chesnut*. New York: Oxford University Press, 1984.

星の音が聞こえる：
Tess Gallagher の“Rain Flooding Your Campfire”論

篁 雅明

SYNOPSIS

In Tess Gallagher's story "Rain Flooding Your Campfire," her counterversion of Raymond Carver's masterpiece "Cathedral," the narrator, as in the antecedent, experiences blindness through a blind man at the ending. But surprisingly, she stands naked out in her front yard at that time. The purpose of this paper is to consider what her nakedness expresses. And the consideration leads us to conclude that one of the things which make the ties between two persons stronger is an attempt to share the other's sorrows. To discuss the reason that the story is titled "Rain Flooding Your Campfire" also comes within the scope of this paper. We see the title suggests that the time will surely come when you can talk about your melancholy events with smiles.

序

Raymond Carverの短編“Cathedral”(1983)は、彼の名を飛躍的に高めた秀作であるが、彼の未亡人であるテス・ギャラガーは、この物語の基になったのは彼女の体験談であり、それを基に彼女が短編を書こうとしていた矢先、そのマテリアルをカーヴァーが盗用してしまった、と主張している(Max 51)。つまり、「大聖堂」に登場する語り手の妻と視覚障害者の Robert は、ギャラガーと彼女の友人である Jerry Cariveau をモデルにして造形されたのだ(Introduction 14-15)。¹そして、2000年にギャラガーが来日した際のインタビューによると、彼女は「大聖堂」の見事な出来に驚き、自分が書こうとしているものに自信が持たなくなるが、カーヴァーの激励と助言もあり、その作品はとうとう完成する(391)。それが「あなたのキャンプファイアを水浸しにする雨」(1997)である。²

本稿では、この作品の二つの謎に注目して議論を進めていきたい。

まず、最終場面において、前庭にいる Norman Roth を迎え入れるため語り手が家の外に出ていく時、彼女が素っ裸であるのはなぜか、という問題だ。季節は夏で蒸し暑く、真夜中なので傍観者は周りに誰もおらず、ノーマンは目が見えない、という背景はあるものの、女性が裸で家の外に出ていくのは、どう考えても尋常

ではない。読者は、衝撃を感じると同時に、何とも割り切れない思いをするはずである。

次に、この作品のタイトルが、なぜ「あなたのキャンプファイアを水浸しにする雨」(以下、「雨」と略記する)なのか、ということを考えたい。この言葉は、物語の幕が開いて早々に、あまり目立たない形で登場するが、その後、読者は二度と目にしないのだ。作品のタイトルという重責を荷なうにふさわしいとは思えない言葉が、なぜタイトルに採用されているのであろうか。

以上二つの問題について、それぞれⅠ章、Ⅱ章で論じる。そして、「雨」という作品が表現しようとしていることを明らかにしたい。

I

「大聖堂」と「雨」の顕著な違いの一つに、視覚障害者の描き方がある。

「大聖堂」のロバートを見ていると、この人は本当は晴眼者ではないか、と疑いたくなってくる。例えば、彼の服装は茶系統で統一されており、なかなかお洒落だ。食事の時も、食物の位置をすぐに把握し、ナイフとフォークを巧みに使いこなす。これまで様々な仕事をした経験があり、語り手をして“a regular blind jack-of-all-trades”(272)と思わしめるほどだ。また、ロバートの来訪を疎ましく思っている語り手から意地の悪い質問をされても、ロバートは負けてはいない。ロバートは、コネティカット州から語り手たちの住むニューヨーク州まで、列車で移動する。その際、右側の席に座ると佳景が見えることをよく知っている語り手は、どちら側の席に座ったのか、とロバートに聞く。この失礼な質問に語り手の妻は憤慨するが、ロバートは、右側です、と速答する。このようにロバートは、視覚障害というハンディにもめげず、抜群の勘を駆使し、強くたくましく生きる人物として造形されているのである。³

一方、「雨」のノーマンは、ロバートとは正反対の造形が施されている。まず、語り手たちの家にやって来る時から、ノーマンは失敗をして恥をかく。土曜日に来訪する約束であったのに、コンピュータ制御の音声時計のプログラム・ミスのため、彼は一日早く着いてしまうのだ。予定が狂って語り手は大いにあわてるが、遠路はるばるやって来たノーマンに出直してこいとも言えず、急きょ何とか都合をつけて、彼を受け入れる。

その後ノーマンは、Ernest、Mr. Gallivan、Sal Fischer、Margaret、サルの飼犬のRipperと出会うが、これは不幸な出会いとなる。

アーネストは、ノーマンのハイテク音声時計を見た時、興味本位でその値段を聞く。人の持物の値段を聞くこと自体がマナーに反しているのに、身障者用の特殊な道具の値段を聞くに至っては、嫌がらせに等しい。ノーマンは、役所の身障者相談室を通して買った、とだけ答え、公的支援による割引価格で購入できたことを示唆する。その後のアーネストと語り手の反応はこうである: “‘Good to see the taxpayers’ dollars helping a few needful sorts,’ Ernest said. I shot him a shut-up-or-I’ll-kill-you look, but he just grinned.”(166) 個人的恨みのない人に対し、アーネストがなぜこんな陰湿なことを言うのか、理解に苦しむ。

また、サルとマーガレットは、不意に現れた視覚障害者を終始敬遠し、ノーマンに話しかけようともしない。これも失礼な態度である。そして、犬のリッパーまでひどいことをする。ギャリヴァンの家で夕食の最中、ノーマンは突然トイレに立つ。これだけでも気まずい思いをするのに、ノーマンはこういう時でも一人で行動できない。他の男性が誰も手を貸そうとしないので、女性である語り手にトイレまで連れていってもらい、彼女を長く待たせることになる。情けなくなったノーマンは、トイレの中で思わずむせび泣く。その泣声を聞いた語り手は驚き、女性である自分はもうこれ以上ここにいない方がよいと判断し、食堂に戻ってアーネストにノーマンの手引きを頼む。アーネストは渋々承諾し、ノーマンを食堂に連れて帰るが、その時突然、リッパーがノーマンに走り寄り、彼のズボンの裾にかみ付いて引き裂こうとするのだ。サルがあわてて犬を引き離し事態は收拾するが、その時のノーマンの様子を、語り手はこう言う: “He looked strangely disheveled with his trouser cuffs askew.”(169)泣き面に蜂とは正にこのことである。

しかし、最も罪が深いのはギャリヴァンである。自宅から語り手の家へ移動した後、ギャリヴァンは、ノーマンが星座について何も知らないことを知る。するとギャリヴァンは、ノーマンを屋外に連れ出す。そして、夜空に向かってノーマンの片腕を高く掲げ、ひしゃくの形に動かしながら、これが北斗七星だ、などと“a stationmaster”(174)のように大声を出して教える。ところが驚いたことに、その時夜空は曇っており、星は全く見えないのである。かなり酒を飲んでいい気分になっているギャリヴァンは、ノーマンの目が見えないのを好いことに、自分の星座の知識をひけらかしながら、ノーマンを慰み者に行っているのだ。これだけでも相当悪質ないたづらなのに、星座の話がすんだ後、ギャリヴァンはノーマンを語り手の家の中へ導かず、前庭の木の近くに彼を一人残し、自分はさっさと帰宅してしまうのである。この行為を語り手は、“It would be just like Gallivan, in some jaunty hail-fellow-well-met good-bye, to forget totally Norman was blind, and simply

strike out for home. Which is exactly what he did.”(174)と説明するが、それにしても啞然とする残酷な仕打ちである。

このように「雨」は、「大聖堂」とは極めて対照的に、何かと苦勞の多い視覚障害者の孤独感と屈辱感をしばしば描き、読者に深い衝撃を与えるのである。

こういった残酷な状況の中で、ノーマンの唯一の味方と言えるのが語り手である。語り手は、10年前にシアトルで、日に10時間もノーマンと二人で仕事をした経験を持つ。その仕事が一段落すると、語り手は東海岸に移住したが、二人はその後カセット・テープで声の文通を続け、友情を深めてきた。だから、妻に先立たれて傷心を抱きながらも、この度自分を訪ねてきてくれたノーマンのことを、語り手はこう言うのだ：“I genuinely liked this man and was very moved by the fact he’d taken the trouble to visit me at this difficult time in his life.”(163) また語り手は、シアトル時代に、ノーマンと、後に彼の妻となる Caroline の3人で行った登山旅行のことを、こう回想する：

I also recalled helping him across a log over a river as we’d headed up Mount Angeles, how scared Caroline had been. But Norman had trusted me on the unsteady log, the river rushing and deep ten feet below us. That trust still held a place with me, that’s why Norman is here, I thought.(172)

語り手は、ノーマンとの友情の絆について、大きな自信と誇りを持っているのである。

しかし、その友情の絆を断ちかねない事件が起きる。ギャリヴァンがノーマンに星座を教えている時、語り手は、アーネストと二人で寝室の窓からその様子を眺める。語り手たちはこの後ベッドに入るが、その時のことを彼女はこう回想する：“I had wanted to stay awake until Norman was safely inside and in his room—but Ernest’s hands began to move over me until my shape seemed to rise and drift from the room. I don’t even remember when I closed my eyes.”(174) 結構婉曲な表現であるが、要するに語り手は、ノーマンが無事屋内に戻ってくるのを確認せずに、アーネストとセックスをしてそのまま眠ってしまうのだ。ノーマンが頼りにできるのは、現状では語り手しかいないことを考えれば、これもひどい仕打ちである。

あってはならないこの出来事をきっかけにして、語り手は、自分とノーマンの人間関係の見直しを余儀なくされる。

それまで語り手は、良き友人として、ノーマンの視覚障害性に共感を示そうと

しばしば努めてきた。その際語り手は、主にノーマンの聴覚に注目する。シアトルでノーマンのためにしていた仕事の内容について、語り手はこう言う:

My job included typing, running errands, filing, and accompanying the blind man to court. But most of the time was spent reading out loud to him from police reports. We were working Research and Development for the Seattle Police Department. (159)

つまり、語り手とノーマンのコミュニケーションでは、主に聴覚が重視されてきたのである(もともと、これは語り手とノーマンの場合に限った話ではなく、どの視覚障害者とのコミュニケーションにおいても、聴覚は極めて重要な役割を果たす)。だから、自宅でノーマンたちと酒を飲んでいる時、グラスの中で氷がぶつかり、語り手は自然にこう思うのだ: “Ice cubes were clinking in glasses. Norman hears those ice cubes, I thought hazily, and felt close to him in the old ways...”(171-72) つまり語り手は、ノーマンの耳を自分の耳に重ね合わせようとする事により、彼の視覚障害性に対して共感を示そうとするのである。

これは確かに意義のある試みだが、この作品は更に、視覚障害者の心の痛みに共感を示すことの重要性を、強く表現する。前述したようにこの作品には、ノーマンが人前で何か失敗をして気まずい思いをしたり、人から見下されるような仕打ちを受けて屈辱を感じる場面が、しばしば登場する。そして語り手は、そういう場面をつぶさに目撃している。一方、語り手が何か失敗をして恥をかいたところをノーマンに知られたり、彼から見下されるような羽目になったことは、過去に一度もなかった。しかし、語り手がノーマンに深い共感を示すためには、二人の人間関係を可能な限り対等しておく必要があるはずだ。従って、ノーマンをしばしば苦しめてきた孤独感と屈辱感を、語り手も一度は経験し、なおかつ、彼女がそういう経験をしたことに、ノーマンが気付かねばならないのである。

上述したことに関連して指摘するが、真夜中の屋外に一人で長時間放置されている間、ノーマンが確実に察知したと考えられることが二つある。一つは、自分を放置したまま、語り手が眠ってしまったことだ。これは、いつまでたっても語り手が来てくれないことから、容易にわかるはずだ。もう一つは、眠る前に語り手がセックスをしたことである。語り手は、アーネストより先に寝室に行き、自分一人でベッドにもぐり込むが、その時の周囲の状況をこう説明する: “Then I heard voices outside on the lawn. It was summer and the screens were on, so whole good-night love scenes from the neighborhood teenagers, or even lovemaking noises

from the nearby houses, would drift through the windows.”(173) ここで語り手が聞く「外の芝生の上の声」というのは、ギャリヴァンとノーマンの星座の話である。その後、アーネストが寝室に入ってきて、ギャリヴァンとノーマンは前庭から車道に出ていくが、その時でも語り手はこう言う: “Ernest and I got back into bed, but we could still hear them.”(174) 要するにこういう状況では、逆に語り手の声も、ノーマンにはよく聞こえてしまうのである。作品の冒頭でノーマンを読者に紹介する時、語り手が“Norman Roth, a blind man who hired me because he liked my voice”(159)と述べていることを、ここで思い出そう。最終場面の語り手に悪気があったとは思えないが、結果的に、語り手はノーマンをないがしろにし、彼の信頼を裏切ったことになる。そして、その恥ずべき事実が、ノーマンに伝わってしまうのだ。

眠りに落ちた語り手は、前庭の木のそばにいるノーマンの夢を見る。これは、彼女の後ろめたさの表れであろう。それから、語り手は突然目覚める。隣家の明かりはもうすっかり消えており、時間がかかなり経過したことがわかる。そして語り手は、ロウブを羽織ろうともせず、あわててノーマンのところへ駆け付ける。ノーマンの身の安全に関して最終的な責任を負うのは、現状では自分しかいないことを、語り手は痛感しているのだ。しかしその一方で、この時の語り手には、ノーマンに合わせる顔がないことも事実である。性欲と眠気にあっさりと屈してしまい、彼女は今や、ノーマンに対して誠に申し訳ない、恥ずかしい気持ちで一杯になっている。約束の日を間違えて1日早く到着した時、ノーマンは“*I’m so humiliated. . . I could evaporate!*”(163)と語り手に言うが、これは最終場面の語り手にも似つかわしい台詞なのだ。

最終場面における語り手は裸で、彼女がセックスをしてそのまま眠ってしまったことを如実に示す、屈辱的な状態にある。それと同時に、恥ずべき失態のため、夜の屋外にノーマンを長時間放置した自分も、ギャリヴァンたちと五十歩百歩の人間である、という精神的恥部も語り手はさらけ出しているのだ。ノーマンが来訪する前には表面化しなかった語り手の不面目な一面が、鋭く暴かれたのである。語り手は、仮にノーマンから見下されたとしても、反論できない状態にあるのだ。

しかし、この作品はここで終わらない。作品の幕切れにおけるノーマンと語り手のやり取りは、極めて簡潔であるが印象的だ: “Norman let go of the tree and said, ‘That you?’ ‘Yes,’ I said. Then I slipped my hand under his elbow. . . .”(175) 語り手はこの時、見苦しい言い訳を一切しない。つまり彼女は、自分の非を全面的に認めているのだ。そして彼女は、裸であることなど構わず、非常に遅きに失したが、

とにかくノーマンを安全に手引きすることに専念する。つまり、語り手の不面目な一面が暴露された直後に、今度は彼女の美しい一面が表出するのである。語り手の、この矛盾に満ちた振舞は、われわれの胸を打つ。語り手のみならずわれわれも、自分の抱える矛盾にしばしば振り回され、狼狽するからだ。⁴

一方ノーマンは、自分が今まで、何か失敗をして気まづい思いをしたり、人から見下されて屈辱を感じたのと同じような経験を、語り手もしたことを知る。この時ノーマンの心の中は、彼女は自分の心の痛みをかなりわかってくれた、自分は同じ人間として可能な限り彼女と対等になれた、自分はもう以前ほど孤独ではない、という思いで満たされているのである。だからノーマンは、語り手の失態を一切責めず、何事もなかったかのように、彼女の手引きに身をゆだねるのだ。

この時、夜空はいつの間にか雲が晴れており、語り手は多くの星を目にするが、もちろんこれは、単なる偶発的気象現象ではなく、作者の意図的操作によるものである。

語り手は、ギャリヴァンがノーマンに星座の話をしている時、“I began to think how strange it is that stars are silent. What if each star made the smallest noise—say the insistent tone of Norman’s watch—what an enormous din would pour down on us!” (174)と思う。ここで語り手が言う「音を発する星」は、ノーマンの音声時計が時間を音で知らせることから発想されている。語り手がなぜこんなことを考えたのかというと、ギャリヴァンが星座の形についてどれほど説明しても、星の光の美しさはノーマンに伝わらないからだ。それで、もし星が音を発するなら、晴眼者より研ぎ澄まされた聴覚を駆使することにより、ノーマンにも星の光の美しさが多少は伝わるのに、と語り手は考えるのだ。⁵

その後、語り手がノーマンと前庭で会う時、風に吹かれたカエデの木が出す音が、彼女の耳には、その時見えるようになった星の音として聞こえてくる：“... the maples, in a light breeze, made a soft rushing above us which could just as well have belonged to the stars, visible now and blinking calmly down.”(175) そして、ここでわれわれが思い出すのは、ギャリヴァンから星座の話を詳しく聞いたノーマンの心象風景を、語り手がこう描写していることだ：“The sky inside his mind must have seemed hugely populated after all the instruction he’d taken.”(175) これらの描写を総合して考察すると、語り手が星を見つめながら同時にその音を聞く場面は、彼女がノーマンの精神世界を見つめている様子を映像化したもの、と解釈できる。ノーマンの心の痛みを痛感し、彼の視覚障害性に深い共感を示した語り手は、象徴的次元において、もう一人のノーマン、とでも言うべき境地に達しているのだ。⁶

他者の心の痛みを正確に理解することは、誠に困難である。しかし、その理解度を深めようと試みることは、それほど困難ではないであろう。人と人との精神的絆の強さを左右するものの一つは、相手の心の痛みの理解度の深さなのである。

II

さて、この作品のタイトルになっている、「あなたのキャンプファイアを水浸しにする雨」という言葉について語り手は、“Norman and I had a saying in our Seattle days when things bummed us out. ‘Rain flooding your campfire,’ we’d say to each other, and whatever it was didn’t seem so bad.”(160-61)と説明する。つまりこれは、シアトル時代、二人が使っていたおまじないなのである(ここで言うキャンプとは、語り手、ノーマン、キャロラインの3人で行った、アンジェラス山への旅のことを指している)。

アンジェラス山において彼らはキャンプファイアを囲むが、語り手は、ノーマンはその火を見つめることができたと言う:

He gave keen attention to details. I remembered the last time I’d heard him say the word “watched.” “I love to *watch* the flames”—he’d said. Our campfire was blazing on that long-ago mountainside and the heat of the flames danced against our faces. We watched. (171)

その火の燃える音と熱気、薪や煙のにおい等に全身で注意を向け、視覚以外の感覚を総動員して、ノーマンは、火とはどんなものか知ろうとする。そして、必ずしも正確とは言えないであろうが、彼なりの認識を得るのだ。これが、ノーマンにとっての「見つめる」行為なのである。

上述したように、このキャンプファイアはノーマンにとって忘れられないものだが、この時、雨が降ってその火が消えた、ということは、作品には一切書かれていない。しかし、語り手とノーマンが共有するおまじないの中に雨が登場するということは、このキャンプの時に雨が降ったことを強く暗示している(何と言っても、山の天気は非常に変わりやすく、突然の雨など、全然珍しくはないのである)。

その雨にまつわるエピソードの内容は、次のように考えられる。彼らがキャンプファイアを囲んで楽しんでいると、突然大雨が降り、火は消え、3人はあわて

てテントの中に入る。せっかくのキャンプファイアは台無しとなり、彼らはがっかりする。しかし、旅先でのこういう厄介なトラブルが、後になって笑いながら話せる良い思い出に変貌することは、よくある。こういう逆転現象が、二人のおまじないには反映されているのだ。実際、ノーマン夫婦にとってこの登山旅行は、極めて貴重な思い出となっている。山中で撮った記念写真について、語り手はこう言う: “Before she lost her voice, his wife had been looking at the pictures with him, describing them to Norman. The photos of that long-ago trip gave them solace, he said. He used that word, ‘solace.’”(162) 要するに「あなたのキャンプファイアを水浸しにする雨」という言葉は、何かが起こり得るような出来事が起きたとしても、それについて笑いながら話せる日が、いつかはきっとやって来る、というポジティブな考え方を表明しているのだ。だから語り手とノーマンは、この言葉をおまじないとして使うのである。

最終場面においてノーマンのところに駆け付けた時、語り手は彼に対して“something consoling”(175)を言う。この台詞の内容は明示されていないが、「あなたのキャンプファイアを水浸しにする雨」ではないはずだ。ノーマンが夜の屋外に一人で長時間放置された責任を負うべき語り手には、このおまじないを唱える資格などないからである。しかし、このおまじないが作品のタイトルになっているということは、作品のクライマックスである最終場面にも、このおまじないの精神が生きていることを暗示している。ノーマンが放置されたという悲しい出来事について、彼と語り手が笑いながら話せるようになるのも、時間の問題なのである。

結 論

このおまじないに関して一つ注意すべきなのは、語り手とノーマンがシアトルでおまじないを唱えていたのは、ノーマンがトラブルに直面した時に限られていたことだ。シアトル時代について語り手は、“those times I’d had to think what he needed for an entire day”(172)と回想している。確かに、視覚障害者が実社会で仕事をしようとすると、依然として様々な制約を受け、公然と差別されることさえある。それで、ノーマン＝視覚障害のため何かと苦勞する人、語り手＝ノーマンを手助けして励ます人、という役割が定着し、語り手が率先しておまじないを唱えることになるのだ。

しかし、作品の最後で語り手は、ノーマンの心の痛みを初めて実感し、言わば、

ノーマンからおまじないを唱えてもらう立場に初めて立つのである。このアイロニカルな状況が示唆するのは、視覚障害者のためにだけ、このおまじないはあるのではない、ということだ。

ノーマンは、視覚障害があるものの快活で、今時珍しい善人として造形されている。ところが彼は、周りの者から次々とひどい仕打ちを受ける。厳しい孤独の中、愚痴もこぼさず、彼はその苦難に耐える。ノーマンがそのような目になぜ会わねばならないのか、という理由について、ギャラガーは一切説明していない。その行間から読み取れるのは、人間は、自分とは異質の弱者をいじめるのが本質的に好きな動物である、ということだ。ノーマンは、理不尽極まりない残酷な状況に置かれているのである。

しかし、ノーマンの人生の理不尽さは、彼だけのものではない。というのは、この世の中の多くの人も、自分には大きな落度がない時でさえ、苛酷な現実から様々な形で虐げられ、失望や屈辱をしばしば感じつつ、生きていかざるを得ないからだ。「大聖堂」と同じく「雨」においても、視覚障害者と晴眼者の間の障壁は作品の最後には消滅し、両者は同化するのである。

注

- 1 また、カーヴァーと共同で *American Short Story Masterpieces* (New York: Delacorte, 1987) を編集した Tom Jenks は、「大聖堂」のマテリアルについてこう述べている: "During the days, Ray and I read stories for a book we were working on and at night we watched TV. One night . . . Ray began to tell about another night of TV: the night the blind man for whom Tess once worked had come to visit. Tess told her side, too—how Ray was uneasy about the man's visit, uncomfortable with his blindness and his familiarity with Tess, a mild jealousy rising in Ray. Their evening was slow and tedious, and ended with the three of them watching PBS. . . . But on the night the blind man was visiting, Tess had fallen asleep, and then a program about cathedrals came on. The blind man had no idea what a cathedral looked like, and in the end, Ray sat on the floor with him, holding his hands, drawing a cathedral so the blind man could sense the miracle of the shape." (141-42) この二人の話を経合すれば、「大聖堂」は私小説的要素がかなり強い作品ということになる。「大聖堂」に限らず、カーヴァーの作品は概して私小説的であり、そのことが批判されたりもする。この問題に関しては、彼の先妻 Maryann の見解が有力な反論となるであろう: "Ray was a fiction writer. His work is not strictly autobiographical. . . . The fact is that all happy families are alike, as Tolstoy observed, but unhappy families are unhappy in a unique way. Ray fastened on what was unhappy and unique in a situation and was able to create a dramatic story rather than a bland tale with no tension. A lot of times, as I've said, he'd take a kernel of something that really happened and convert it into a fine story." (75)

- 2 ギャラガーは、「雨」と「大聖堂」の関係についてこう述べている: “My story became its own story, but it was also in dialogue with his. Literature isn’t a closed circuit. It’s a universe full of intersecting dialogues.”(Stull 9) 夫婦で小説家というカップルは時々見かける。しかし、自分が温めていたマテリアルを配偶者に盗用された場合、こう言い切れる人は少ないであろう。要するにギャラガーは、とにかく「良い作品」が誕生することを最優先しているのであり、この姿勢は立派である。
- 3 「大聖堂」は、目は見えるが自閉的な語り手が精神的視覚障害者であり、目は不自由だが極めて外向的なロバートが精神的晴眼者である、というアイロニーをめぐる物語である(筈 59)。従ってロバートは、非常に鋭い勘の持主として描かれる必要があったのである。
- 4 カヴァーとも親交のあった作家の William Kittredge は、「有益な小説」についてこう定義している: “Chekhov understood that stories, when they are most valuable, are utterly open in their willingness to make metaphor from our personal difficulties. Our most useful stories focus simultaneously on our most generous and betraying ways. These troubles could be yours, the story says, this unfairness *is* yours, and so are these glories.”(95) キトリッジによれば、善悪の板板みになった人間の矛盾を描くことが、小説の重要な役目なのである。そして、この定義に従えば、「雨」は有益な小説ということになる。「美しい友情」が性欲と眠気にあっさり屈するというエピソードは、実に人間的で他人事とは思えないし、同時に、最終場面でノーマンを物静かに手引きする語り手が具現化する善性もまた、われわれのものと考えられるからだ。
- 5 光を音に翻訳しようとする試みは、“Reading Aloud”(1984)というギャラガーの詩にも見られる。この詩の語り手が、ダイヤモンドから何を連想するのか、とある視覚障害者に尋ねると、こんな答が返ってくる: “Their light—a hiss in the rain when the cars pass.”(105)もともと、こういう翻訳は視覚障害者とのコミュニケーションに特有の現象ではない。晴眼者も、例えば、星の光を表現するのに「チカチカ」「キラキラ」「ピカピカ」といった擬態語を使用するからである。
- 6 「雨」には“The Harvest”(1983)という別のヴァージョンがあり、こちらが初版である。初版と改訂版の大きな違いは、結末にある。初版では、語り手とアーネストはセックスをしないで眠りに落ちる。夢の中で語り手は、前庭の木のそばに放置されたノーマンのところにへ歩み寄ろうとする。そこで突然語り手は目覚め、ノーマンの安否を確かめに行く(この時、彼女が裸であるかどうかについては、何の言及もない)。するとノーマンは、来客用寝室のベッドで眠っているのだ(つまり初版では、ギャリヴァンがノーマンを寝室まで手引きしたことになる)。安心した語り手は自分の寝室に戻ろうとするが、ふと思い直して玄関の方へ行き、前庭を見つめる。すると、先程夢の中で見た、ノーマンと自分の姿が語り手の脳裏によみがえってくるのだ。語り手は、夢を現実に再体験するかのように、家の外に出て前庭を歩いていく。これが初版の幕切れである(127-28)。ここには、ノーマンの無事を確認しないで先に眠ってしまったことに対する、語り手の強い後ろめたさが表現されている。つまり語り手は、自分もギャリヴァンたちと五十歩百歩の人間であることを最後に思い知るわけだが、語り手の覚醒がそのレベルにとどまるのであれば、物足りないと言わざるを得ない。改訂作業において、語り手がノーマンの心の痛みを共有し、彼の視覚障害者に深い共感を示す場面が書き加えられたことは、誠に適切である。

参考文献

- Carver, Maryann. Interview. *Raymond Carver: An Oral Biography*. By Sam Halpert. Iowa City: U of Iowa P, 1995. 54+.
- Carver, Raymond. "Cathedral." *Where I'm Calling From: New and Selected Stories*. New York: Atlantic Monthly, 1988. 266-79.
- Gallagher, Tess. "Carver Country." Introduction. *Carver Country: The World of Raymond Carver*. By Bob Adelman and Raymond Carver. New York: Scribner's, 1990. 8-19.
- . "The Harvest." *The Ways We Live Now: Contemporary Short Fiction from the Ontario Review*. Ed. Raymond J. Smith. Princeton: Ontario Review, 1986. 116-28.
- . "Rain Flooding Your Campfire." *At the Owl Woman Saloon*. 1997. New York: Scribner-Simon, 1999. 159-76.
- . "Reading Aloud." *Amplitude: New and Selected Poems*. Saint Paul, MN: Graywolf, 1987. 104-06.
- Jenks, Tom. "The Origin of 'Cathedral.'" *An Introduction to Fiction*. Ed. X. J. Kennedy and Dana Gioia. 8th ed. New York: Longman, 2001. 489.
- Kittredge, William. "Bulletproof." *Remembering Ray: A Composite Biography of Raymond Carver*. Ed. William L. Stull and Maureen P. Carroll. Santa Barbara, CA: Capra, 1993. 85-95.
- Max, D. T. "The Carver Chronicles." *New York Times Magazine* 9 Aug. 1998: 34+.
- Stull, William L., and Maureen P. Carroll. "Two Darings." *Soul Barnacles: Ten More Years with Ray*. Ed. Greg Simon. Ann Arbor: The U of Michigan P, 2000. 1-11.
- テス・ギャラガー 「レイ・カーヴァーが求めていたもの: テス・ギャラガー インタビュー」『中央公論』1 (2001): 384-94.
- 籠 雅明 「視覚障害者たちの手話: Raymond Carver の"Cathedral"」『関西アメリカ文学』28 (1991): 52-67.

Repair Strategies in PF: *No*-deletion in Japanese Noun Phrases

Yuko Maki
Fumikazu Niinuma

SYNOPSIS

In this paper, we discuss several repair strategies for PF-violating structures. Bošković (2002) shows that PF-violating structures, in which a sequence of consecutive homophonous *wh*-phrases causes a violation in multiple *wh*-fronting languages, are remedied by pronouncing the *wh*-phrase in a position other than the head of the chain. The repair strategies pointed out in Lasnik (2001) are executed by VP-deletion and IP-deletion in the context of Pseudogapping structures and matrix Sluicing structures in English respectively. We argue that a sequence of consecutive genitive *no* and pronominal *no* in Japanese nominal phrases also causes a PF violation, and that NP-deletion proposed by Saito and Murasugi (1990) repairs the otherwise crashing structures. Furthermore, we assume that a sequence of consecutive *nos* is a PF violation not so highly ranked. Hence, if the example involving a sequence of consecutive *nos* could not be repaired by NP-deletion but there is no other way to give the intended interpretation, then the example is assumed to be well-formed.

0. Introduction

In this paper, we explore several situations where a syntactic violation is remedied in PF. In multiple *wh*-fronting languages, every *wh*-element needs to be fronted unless the movement in question brings the sequence of the same words (PF violation). Bošković (2002) argues that the PF-violating structures are saved by pronouncing the *wh*-word in a position other than the head of the chain. This is a repair strategy from Bošković (2002). Lasnik (2001) also discusses such a strategy with Pseudogapping structures and matrix Sluicing structures in English. The deletion of VP in the former and IP in the latter saves the otherwise PF-violating structures. In Japanese, we can also observe a similar effect in which the sequence of genitive *no* and pronominal *no* is prohibited as shown in (1).

- (1) a. Kono hon - wa John - **no** da¹
 This book - top John is

‘This book is John’s.’

- b. *Kono hon - wa John -no-no da
 This book-top John -gen-pro is (Saito and Murasugi (1990))

Given that, we argue that the repetition of *no* is also a kind of PF violation and that a NP-deletion in PF remedies this violation. The organization of this paper is as follows. In section 1, we see the repair strategies from Bošković (2002) and Lasnik (2001). Section 2 discusses Japanese data shown in (1) and argues that the NP-deletion proposed in Saito and Murasugi (1990) is concerned with the example in (1). Some problems given by the analysis in section 2 are discussed in section 3. Section 4 concludes this paper.

1. Repair Strategies in PF

1.1 Data from Multiple Wh-fronting Languages (Bošković (2002))

In this subsection, we will briefly see the repair strategy discussed in Bošković (2002). In multiple wh-fronting languages, all wh-phrases undergo fronting.² All Slavic languages belong to this type. Sample sentences from multiple wh-fronting languages are given in (2)-(3) from Serbo-Croatian and Bulgarian, respectively, all of which are from Bošković (2002).

Serbo-Croatian

- (2) a. ?* Ko kupuje šta?
 who buys what
 ‘Who buys what?’
 b. Ko šta kupuje?

Bulgarian

- (3) a. *Koj e kupil kakvo?
 who is bought what
 ‘Who bought what?’
 b. Koj kakvo e kupil?

However, there is an exception to the obligatoriness of fronting of wh-phrases as exemplified in (4)-(5) from Serbo-Croatian and Bulgarian, respectively, which contrast with (2)-(3).

Serbo-Croatian

- (4) a. Šta uslovljava šta?
 what conditions what
 b. *Šta šta uslovljava?

Bulgarian

- (5) a. Kakvo obuslavlja kakvo?
 what conditions what
 b. *Kakvo kakvo obuslavlja? (Bošković (2002))

The examples in (4)-(5) show that the second *wh*-phrase does not front in these languages if it is homophonous with the first fronted *wh*-phrase. As Bošković (2002) points out, what is at stake here is the actual phonological form of the *wh*-phrases. Specifically, if the adverb prevents the second *wh*-phrase from directly following the first *wh*-phrase, the second *wh*-phrase is required to move as well as in (2) and (3), as the following example from Serbo-Croatian shows.

Serbo-Croatian

- (6) a. ?*Šta neprestano uslovljava šta?
 what constantly conditions what
 ‘What constantly conditions what?’
 b. Šta neprestano šta uslovljava?
 what constantly what conditions (Bošković (2002))

That is, leaving a *wh*-phrase in situ is done as a last resort to avoid forming a sequence of consecutive homophonous *wh*-words. How can we capture it formally?

According to Bošković (2002), we are dealing here with a low level PF effect, since the information concerning the pronunciation of *wh*-phrases should not be accessible to syntax. Given that, he argues that we need a PF constraint against consecutive sequences of homophonous *wh*-phrases in these languages (see also Billings and Rudin (1996)).³ In addition, Bošković (2002) adopts Franks (1998)’s idea as a saving strategy, according to which a chain is pronounced in the head position, with lower members deleted in PF, unless the pronunciation in the head position would lead to a PF violation. In other words, it is assumed that the choice in deciding which copy of a non-trivial chain to leave active in the interface is available not only in LF but also in PF.⁴

Let us see what happens if we follow Frank’s proposal. The following example from

Bošković (2002) is a structure of (2) in the output of syntax (note that in (7) just the movement of the object (the movement for focus requirement) is shown.).

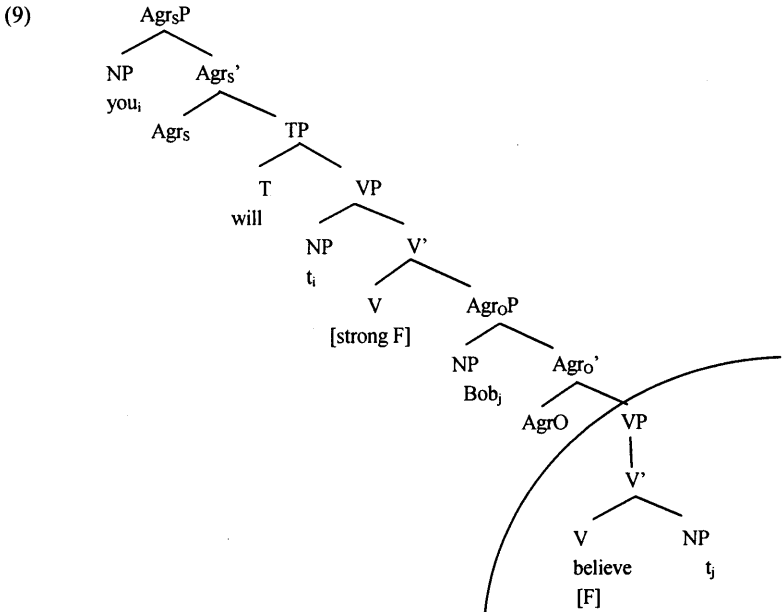
(7) [FP Šta šta_i- [uslovljava šta_i]] (Bošković (2002))

In PF, if the higher member of the chain is pronounced, the PF violation in question follows. However, the pronunciation at the lower copy can save the otherwise PF-violating structure. This is a repair strategy from Bošković (2002).

1.2 XP deletion Saves PF Violations (Lasnik (2001))

In this subsection, we will review a repair strategy proposed by Lasnik (2001). Lasnik gives the following split VP structure for (8).

(8) You might not believe me but you will Bob.



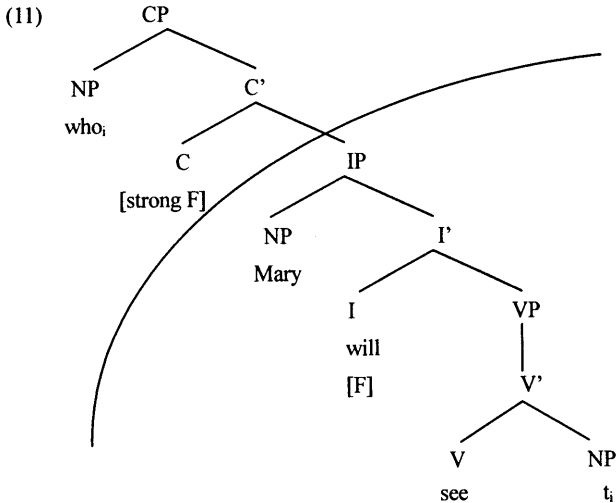
(Lasnik (2001))

In (9), the object NP raises to Spec of *AgroP* to satisfy the EPP requirement of *Agr*. To give a SVO order in English, the verb in the lower V also moves to the higher V in order for some strong feature to be checked. Suppose that just the feature of the lower V is attracted by the higher V, but the category of that remains in situ. In this case, although the requirement of the higher V is satisfied, the lower V becomes phonologically defective (see Chomsky (1995) and Ochi (1999) for details.). Lasnik argues that there are two ways to avoid a PF crash. The ‘normal way’ is to pipe-pipe the entire V. The second is the case worthy of notice. If a category containing the defective V is deleted (VP-deletion in this case), then the defect will be remedied as far as VP-deletion is concerned with PF.

Examples of matrix Sluicing have the same property as Pseudogapping. The structure of (10) is shown in (11).⁵

(10) Speaker A: Mary will see someone.

Speaker B: Who ~~Mary will see~~?



(Lasnik (2001))

In (11), the C head has the strong feature to be checked. If just the matching feature of I is attracted by the C, the I becomes phonologically defective. The ‘normal’ way to salvage it from the PF crash is to pipe-pipe the entire category. The alternative way is to delete the category

containing the defective I (IP-deletion in this case).

Lasnik (2001) also shows that island violations are remedied by ellipsis in Sluicing constructions, as discussed in Merchant (1999). Let us see the following example from Merchant (1999).

- (12) She said that a biography of one of the Marx brothers is going to be published this year, but I don't remember which, [~~IP she said that a biography of *t_i* is going to be published this year~~]

The example in (12) involves Subject Condition, which is classified as PF island in Merchant (1999).⁶ Note that (12) is ill-formed without Sluicing but fine with Sluicing. That is, IP-deletion in PF can save the otherwise PF-violating structure.

In this subsection, we showed that XP deletion could save a structure by deleting XP as far as XP deletion is concerned with PF. This is a repair strategy from Lasnik (2001).

2. Examples from Japanese Noun Phrases

Let us see the example in (1) again.

- (1) a. Kono hon - wa John - no da
 This book - top John is
 'This book is John's.'
- b. *Kono hon - wa John -no-no da
 This book-top John -gen-pro is (Saito and Murasugi (1990))

In (1b), the pronominal *no* that follows the genitive *no* is connected with *John* by the latter Case marker. Given that there is no syntactic violation in (1b), we wonder why (1a) is well-formed but not (1b), contrary to our expectation. Apparently, it seems that there is some rule that prohibits a sequence of consecutive homophonous words as we saw in the examples in multiple wh-fronting languages. Actually, Okutsu (1974) argues that there is a minor rule which reduces two consecutive *nos* to one and that genitive *no* will probably be deleted in this case. However, Okutsu does not explain how this rule works.

In this section, we argue that there is a PF rule which prohibits a sequence of genitive *no*

and pronominal *no* on the line of Okutsu (1974), and that such a PF violation is remedied by NP-deletion proposed in Saito and Murasugi (1990). Before discussing the main point, in 2.1 we see some properties of pronominal *no*, and demonstrate that pronominal *no* distinct from genitive *no* actually exists in Japanese against Kitagawa and Ross (1982) to show that the problem in (1) is real.

2.1 'NO' as a Nominal Category

Kitagawa and Ross (1982) pursue the logical possibility that *no* in Japanese can be treated uniformly as genitive markers. However, the discussion in Murasugi (1991) gives several arguments against Kitagawa and Ross (1982). Reviewing Murasugi (1991), we confirm that pronominal *no* definitely exists in Japanese and that the problem given in (1) is real.

Before getting into Kitagawa and Ross's analysis, let us see some properties of pronominal *no* in Japanese (see Kuroda (1965), Kamio (1983), McGloin (1985) and Murasugi (1991) among others.). First, pronominal *no* in (13a) needs to be modified by something, different from other pronominal forms, *sore* in (13b) or *kare* in (13c), for example.

- (13)
- a. Taroo - wa *(hidoi) - no - o mita
 Taroo - top horrible - pro - acc saw
 'Taroo saw a *(horrible) one.'
- b. Taroo - wa (hidoi) sore - o mita
 Taroo - top horrible it - acc saw
 'Taroo saw a (*horrible) it.'
- c. Taroo - wa (hidoi) kare - o mita
 Taroo - top horrible him - acc saw
 'Taroo saw a (*horrible) him.'
- (Murasugi (1991))

Secondly, pronominal *no* cannot refer to human beings. If *no* is used to refer to a person, the connotation becomes derogatory.

- (14)
- a. Taroo - no sensei - wa aoi fuku - o kiteiru
 Taroo - gen teacher - top blue uniform - acc is-wearing
 'Taroo's teacher is wearing the blue uniform.'

- b. *Taroo - (no) - no - wa aoi fuku - o kiteiru
 Taroo - gen - pro - top blue uniform -acc is-wearing
 'Taroo's one is wearing the blue uniform.' (Murasugi (1991))

Thirdly, pronominal *no* cannot be used to refer to abstract objects, as shown in (15).

- (15) a. katai sinnen
 firm belief
 'a firm belief'
 b. *katai - no
 firm pro
 'a firm one (belief)' (Murasugi (1991))

Let us move on to the analysis of Kitagawa and Ross (1982). Note that the genitive marker *no* appears in (16a) and (16b), but not in (16c). On the other hand, in Chinese, the genitive marker appears in the context of (16a)-(16c). Specifically, the genitive marker can be inserted following not only NPs and PPs but also adjectives and relative clauses in Chinese.

- (16) a. Taroo -*(no) hon
 Taroo gen book
 'Taroo's book'
 b. Tokyo -kara -*(no) tegami
 Tokyo -from -gen letter
 'a letter from Tokyo'
 c. akai -(*no) fuku
 red - gen dress
 'red dress' (Murasugi (1991))

Given the examples in Chinese, Kitagawa and Ross (1982) assume a universal rule of modifying marker insertion in order to explain the distribution of the genitive marker in Chinese and Japanese. Although this rule can explain the behavior of Chinese genitive marker, but not that of Japanese. That is, this rule will make all the examples in (16) grammatical contrary to the fact. To get over this problem, Kitagawa and Ross propose a parameterized rule which is a language specific rule in

Japanese. According to this rule, if modifying elements are tensed [+V] like adjectives and relative clauses and NPs which follow modifying elements are not empty, then *no* must be deleted. Concretely, in (16a) and (16b), since both NP *Taroo* and PP *Tokyo-kara* are not tensed [+V], the genitive marker *no* is not deleted. On the other hand, since in (16c) the adjective *akai* is tensed [+V] and the NP following the genitive marker is not empty, *no* must be deleted. Let us see what happens if the NP which follows the genitive marker is empty as shown in (17).

- (17) a. [_{NP}[_{NP} *Taroo*] - *no* *e* (*pro*)]
 Taroo - gen
 b. [_{NP} [_{PP} *Tokyo-kara*] - *no* *e* (*pro*)]
 Tokyo - from - gen
 ‘the one from Tokyo’
 c. [_{NP}[_{AP} *akai*] - *no* *e* (*pro*)]
 red - gen
 ‘the red one’
- (Murasugi (1991))

In (17), no genitive markers are deleted according to the rule.

However, the analysis of Kitagawa and Ross (1982) raises a significant problem as discussed in Murasugi (1991). The empty NP following the genitive marker in (17) is assumed to be an empty pronoun (*pro*), which is known to exist in Japanese on independent grounds. Hence, if the empty pronoun has the properties of pronominal *no* noted above, then the examples in (18)-(19) are expected to be ill-formed, contrary to the fact.

- (18) a. *Sensei* - *ga* *irasita*
 teacher - nom came (+honorific)
 ‘The teacher came.’
 b. *pro* *irasita*
 came (+honorific)
- (19) a. *Sinnen* - *ga* *John* - *o* *kaeta*
 belief - nom - acc changed
 ‘The belief changed John.’
 b. *pro* *John* - *o* *kaeta*
 acc changed
- (Murasugi (1991))

In (18) and (19), the empty pronouns can refer to human beings and abstract objects, respectively. Therefore, the analysis that eliminates pronominal *no* from Lexicon does not seem to work well.

There is more straightforward argument for the existence of pronominal *no*. Okutsu (1974) gives an example from Yuzawa (1953) which shows that there are several dialects in which a sequence of two consecutive *nos* is allowed.

- (20) Kore - wa watasi - no - no - de - wa arimasen.
 This - top I - gen - pro is-not
 '(lit.) This is not my one.'

Furthermore, as pointed out in Murasugi (1991), the pronominal *no* can be found in several Japanese dialects in which the pronominal *no* is realized by a phonetic form distinct from the genitive marker. The examples in (21) and (22) are from Toyama dialect and Kyusyu dialect, respectively.

- (21) a. John - *(no) -ga
 John - gen - pro
 'the one which is John's'
 b. siroi - *(no) -ga
 white - gen - pro
 'white one' (Murasugi (1991))
- (22) a. John - *(no) -to
 John - gen - pro
 'the one which is John's'
 b. akaka - *(no) -to
 red - gen - pro
 'red one'

In (21) the pronominal *no* in the standard Japanese is realized as *ga*, and in (22) as *to*. Finally, note that the examples in (23)–(24) from Toyama dialect demonstrate that the pronominal form shown in (21) and (22) is definitely the same element as the pronominal *no* we have discussed so far, as pointed out in Murasugi (1991).

- (23) *John - no sensei - wa kite-irassharu keredo, Maiku - no ga - wa mada
 John -gen teacher- top come-honorific though Mike -gen pro -top yet
 kite-irassharanai yoo - da.
 come-honorific seem- is
 'John's teacher is here, but Mike's one does not seem to be here yet.'
- (24) a. katai sinnen
 firm belief
 'a firm belief'
 b. *katai ga
 firm pro
 'a firm one' (Murasugi (1991))

The pronominal *ga* cannot refer to human beings or abstract objects as shown in (23) and (24b) respectively, which is analogous to the examples in (14b) and (15b).

Therefore, it is entirely clear that there is pronominal *no* essentially different from genitive *no* in Lexicon against the analysis of Kitagawa and Ross (1982). This pronoun cannot refer to human beings or abstract objects. It is therefore concluded that the problem given in (1): why are two consecutive *nos* reduced to one for some phonological reason? is real.

2.2 NP-deletion in Japanese: Saito and Murasugi (1990)

In this subsection, we will observe the NP-deletion analysis proposed in Saito and Murasugi (1990), which should be the repair strategy to save the otherwise PF-violating structures, a sequence of consecutive genitive *no* and pronominal *no* in this case. Remember that the pronominal *no* cannot refer to abstract objects like *izon* in (26), as we pointed out in 2.1. Therefore the example in (26) is ill-formed, contrasted with that in (25).

- (25) kono hon -wa John -no da.
 This book -top John is
 'This book is John's.'
- (26) *[Sono toki-no Yamada sensei-e -no izon] -wa Taroo-no datta
 that time Prof. Yamada -on -gen reliance -top Taroo was
 'The reliance on Prof. Yamada at that time was Taroo's.'

(Saito and Murasugi (1990))

Let us now consider the following example.

- (27) [Gakubusei -no sensei -e -no izon] -wa yuruseru ga,
 undergraduate-gen teacher -on -gen reliance -top can-tolerate though
 [insei -no] -wa yurusenai
 grad. student -top cannot-tolerate
 'I can tolerate the undergraduates' reliance on the faculty, but not the graduate students'

(Saito and Murasugi (1990))

Notice that the example in (27) is expected to be ill-formed as well as that in (26) contrary to the fact. Given this contrast between (26) and (27), Saito and Murasugi (1990) argue that Japanese has NP-deletion and that the NP-deletion can explain the contrast between (26) and (27). Now let us consider the structure in which NP-deletion occurs.

- (28) [DP [John]_i [D' [D s'] [NP t_i [N' [N reliance] [PP on Mary]]]]]
 (Saito and Murasugi (1990))

On the basis of DP hypothesis (Abney (1987), Fukui and Speas (1986) among others), in (28) the subject *John* receives a theta role in Spec of NP, moves to Spec of DP for the requirement of genitive Case checking, and the NP is deleted. Now let us compare (26) with (27), the structures of which are as shown in (29) and (30) respectively.

- (29) *_{[DP Sono t_o t_o-no [NP Yamada sensei-e -no izon]] -wa}
 that time Prof. Yamada -on -gen reliance -top
_{[DP [Taroo-no]_j [NP e]] datta}
 Taroo-gen was
- (30) _{[DP [Gakubusei -no]_i [NP t_i sensei -e -no izon]] -wa yuruseru ga,}
 undergraduate-gen teacher -on -gen reliance -top can-tolerate though
_{[DP [insei -no]_j [NP e]] -wa yurusenai}
 grad. student-gen -top cannot-tolerate
 (Saito and Murasugi (1990))

Taroo in (29) and *insei* in (30) both bear the subject theta role. Hence, the deleted NPs in (29) and (30) are as shown in (31) and (32) respectively.

- (31) [NP t_j yamada sensei-e-no izon]
 (32) [NP t_j sensei-e-no izon] (Saito and Murasugi (1990))

Note that the deleted NP in (30) has an antecedent, but that in (29) does not, since the antecedent in (29) does not contain the trace contained in the deleted NP. Hence, it is entirely clear that the contrast between (26) and (27) is explained by the NP-deletion but not by the property of *no*. In the next subsection, we get into the main point in this paper. That is, the structures violating a PF constraint against a sequence of consecutive *nos* are salvaged by NP-deletion in PF.

2.3 Analysis

We assumed above that a sequence of consecutive homophonous *nos* gives rise to a PF violation.⁷ Now we propose that the following constraint makes NP-deletion obligatory and salvages the PF-violating structure from crashing.

- (33) NP-deletion is obligatory iff
- No* is in the NP which is a complement of D, and
 - The *no* immediately follows the *no* in D (genitive marker), and
 - There is a movement from Spec of NP to that of DP for the genitive Case checking.

Let us consider the problem in (1) again, which is shown as (34).

- (34) *Kono hon - wa [DP John_i -no [NP t_i — ~~no~~]] da
 This book-top John -gen pro is

Given the constraint in (33), the NP in (34) is obligatorily deleted. Hence the two consecutive *nos* never occur in (34).

Let us consider another example as shown below.

- (35) [DP Taro_i -no [NP *t_i* [DP suugaku_j -no [NP *t_j* seiseki]]]] -wa itsumo ii ga
 Taro_i -gen mathematics -gen school-record -top always good but
 Jiro_i -no -wa aikawarazu-da
 Jiro_i -top as usual-is
 'Taro's school record for mathematics is always good, but that of Jiro's remains
 as bad as before.'

In (35), the NP-deletion is applied to the subject of the second conjunct, the structures of which are as shown in (36).

- (36) a. [DP Jiro_i -no [NP-*t_i*-[DP (no)_j -no -[NP-*t_j*-(no)]]]]]
 Jiro_i -gen pro -gen pro
 b. [DP Jiro_i -no [NP-*t_i*-no]]
 Jiro_i -gen pro

Two kinds of structures are assumed for the deleted NP in (35), as shown in (36). First, if two *nos* stand for *suugaku* and *seiseki* respectively and both of them are connected by a genitive marker *no*, then the structure in (36a) follows. Second, if a pronominal *no* stands for *suugaku-no-seiseki*, then the structure in (36b) follows. In either case, the constraint in (33) obligatorily deletes the NP to salvage the PF-violating structure from crashing.⁸ In section 3, we will discuss some problems of this analysis.

3. Problems

In the remainder of this paper, we examine some problem with the analysis in 2.3. Let us consider the following example.

- (37) Aoi kaban -no siiresaki -wa mochinaosita - ga,
 blue bag -gen supplier -top recovered - but
 akai -*(no)-*(no) - wa tsuini toosan-sitesimatta
 red top finally bankruptcy-has done
 'The supplier of the blue bags has recovered, but that of the red bags has gone
 bankrupt finally.'

In the subject of the second conjunct in (37), we cannot delete either of *no* to give the intended interpretation that “the supplier of the red bags has gone bankrupt finally.” Let us consider the structure of it to see what is happening. The following example shows the second conjunct of (37).

- (38) [DP [NP akai ~~-(no)~~] ~~-(no)~~ [~~NP-t_i—no~~] -wa tsuini toosan-sitesimatta
 red pro gen pro top finally bankruptcy-has done

In (38), the first pronoun stands for *kaban*, and the second for *siiresaki*. According to the constraint in (33), the second pronoun is obligatorily deleted by NP-deletion. However, both the first pronoun and the genitive marker are out of the scope of NP-deletion, hence they result in remaining in the structure. That is, there is no way to give the intended interpretation to (37) other than leaving a sequence of two consecutive *nos* in the structure. Since (37) still violates the PF constraint that excludes a sequence of consecutive *nos*, it is expected to be ill-formed contrary to the fact. We can observe the similar effect in the examples below.

- (39) [[John -no inu] -no mimi] wa ookii ga, Mary -no wa chiisai
 John -gen dog -gen ears top big though Mary top small
 ‘The ears of John’s dog are big, but Mary’s ears are small’

- (40) a. [Mary -no mimi] wa chiisai
 Mary -gen ears top small
 ‘Mary’s ears are small.’

- b. [[Mary -no inu] -no mimi] wa chiisai
 Mary -gen dog -gen ears top small
 ‘The ears of Mary’s dog are small.’

- (41) [[John -no inu] -no mimi] wa ookii ga, Mary ~~-(no)~~ ~~-(no)~~ wa chiisai
 John -gen dog -gen ears top big though Mary top small
 ‘The ears of John’s dog are big, but those of Mary’s dog are small.’

The second conjunct in (39) is interpreted like (40a), but not like (40b).⁹ Interestingly, when we add another *no* to the subject of the second conjunct in (39), then the interpretation of (40b) becomes possible, as shown in (41). Let us see the structure of (41) to consider why both of *nos* cannot be deleted. The example in (42) is the structure of the second conjunct in (41).

- (42) [DP [DP Mary_j -no [NP ~~t_j~~—(no)]]_i -no [NP ~~t_i~~—no]] wa chiisai
 Mary -gen pro -gen pro top small

In (42), the first pronoun stands for *inu*, and the second for *mimi*. Note that both of them are in the scope of NP-deletion and the constraint in (33) is applied. After the NP-deletion, two consecutive *nos*, both of which are genitive marker, still remain in the structure. But we can delete neither of them to give the intended interpretation that the ears of Mary's dog are small. Hence, the example in (41) is also assumed to be ill-formed contrary to the fact.

Now, we are facing a serious problem. Remember that we said above that a sequence of consecutive *nos* causes a PF violation as (1b), repeated below, shows.

- (1) b. *Kono hon - wa John -no-no da
 This book-top John -gen-pro is

Then, why are the examples in (37) and (41) grammatical? As we pointed out above, the example in (4b) is excluded by a constraint against a sequence of consecutive homophonous *wh*-words. However if the second *wh*-word is pronounced at the tail of the chain, then the otherwise PF-violating structure can survive as shown in (4a), repeated below.

- (4) a. Šta uslovljava šta?
 what conditions what
 b. *Šta šta uslovljava?

The examples from Lasnik (2001) showed that VP-deletion or IP-deletion remedied the structures containing phonologically defective head or PF island in PF. Hence, if such repair strategies for PF violations are not executed, then ungrammatical examples follow, as shown in (43) for instance. The example in (43) shows that the structure containing the phonologically defective V causes a PF violation.

- (43) *You might not believe me but you will Bob believe.

Notice that the examples in (1b), (4b), and (43) are excluded since they do not apply the repair strategies that are available. On the other hand, in (37) and (41) the repair strategy in question

cannot be applied. That is, it seems that in the latter examples PF violations actually occurs but the fact that there is no way to give the intended interpretation makes them grammatical.

The next point at issue is whether every PF violation is of the same rank. Apparently, the PF violations caused by the phonologically defective V or I in the examples from Lasnik (2001) appear to be more serious than those caused by a sequence of consecutive homophonous words like (1b) or (4b).¹⁰ If it is the case, then we can assume that the examples in (37) and (41) in question can survive, since the PF violation is not so highly ranked and there is no repair strategy available to give them the intended interpretations. Of course, the example in which the available repair strategy is not executed is excluded like (1b) or (4b), even if the PF violation in question is not so serious.

4. Conclusion

In this paper, we discussed the repair strategy for PF-violating structures. We argued that in addition to the repair strategies in PF pointed out by Bošković (2002) and Lasnik (2001), a sequence of consecutive *nos* in Japanese noun phrases is also a PF violation on the line of Okutsu (1974) and that this violation is remedied by NP-deletion proposed by Saito and Murasugi (1990) in PF. Furthermore, we pointed out that a sequence of consecutive *nos* is a PF violation not so highly ranked, and hence if there is no repair strategy available to give the intended interpretation, then the example is assumed to be well-formed. However, significantly, we argued that the examples in which the available repair strategy is not used are excluded, even if the PF violation is not so serious.

Notes

* This paper is a revised version of the presentations that we made at the workshop of the 27th conference of Kansai Linguistic Society held at St. Andrew's University on October 26-27, 2002.

- 1 The boldfaced *no* is used for the examples in which we cannot differentiate genitive *no* from pronominal *no*.
- 2 Although movement of one *wh*-phrase is suffice to check the strong +*wh*-feature of C, even the *wh*-phrases that need not check the +*wh*-feature of C still must be fronted in multiple *wh*-fronting languages. According to Bošković (1999), the *wh*-phrases in these languages are required to move overtly for the independent reason (focus). See Bošković (1999) and Bošković (2002) for details.
- 3 Billings and Rudin (1996) propose such a PF constraint for Bulgarian.

- 4 See Chomsky (1995) for the assumption that in LF we have a choice in deciding which copy to delete.
- 5 See Lasnik (2001) with respect to why the Sluicing at the matrix sentence is regarded as examples of Sluicing, which have normally been considered to happen in embedded clauses.
- 6 Merchant (1999) argues that only the islands which he calls PF islands can be repaired by ellipsis. See Merchant (1999) for details.
- 7 We observed above that the occurrence of consecutive homophonous *wh*-words is not preferred in multiple *wh*-fronting languages. Similar examples are observed in English as well.

- (i) a. John was beginning to start the dinner.
b. *John was beginning starting the dinner. (*V-ing – V-ing)
- (ii) a. John was starting to start the dinner.
b. **John was starting starting the dinner.
- (iii) a. The two big ones you bought were tastier.
b. *The two ones you bought were tastier.
- (iv) a. The one big one you bought was tastier.
b. **The one one you bought was tastier.

(Emonds 1976)

Note that (ib), which violates a constraint against a succession of V-ing forms, is further degraded if exact the same word follows the V-ing form as in (iib). The examples in (iii)-(iv) also show that the ill-formed example in (iiib) is further degraded in (ivb), in which the homophonous words, *one* occur consecutively (the former *one* is a numeral, and the latter is assumed to be of nominal category). Given that, it is assumed that constraints against a sequence of consecutive homophonous words are observed cross-linguistically.

- 8 Of course, NP-deletion is optional when the element directly following the genitive marker is not the pronominal *no* as shown in (i). The same thing holds true for the other examples below. But we show only the examples in which the constraint in (33) is applied.

- (i) [DP Jiroo_i -no [NP *t_i* [DP suugaku_j -no [NP *t_j* seiseki]]]
Jiroo -gen suugaku -gen school-record

- 9 We asked several informants about this example, and a few people said that (39) could also be interpreted like (40b). We assume that the information in the first conjunct enables the people to interpret the second conjunct on the line of the first conjunct's interpretation.
- 10 Remember that in (20) we pointed out that some dialects allow *no* to occur consecutively. Furthermore, Bošković (2002) argues that in (4b) the second *wh*-phrase can be marginally fronted, if it is very heavily stressed. Given that, we assume that these PF violations are not so serious, compared with the PF violations in Lasnik (2001).

References

- Abney, S. (1987) *The Noun Phrase in its Sentential Aspect*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Billings, L. and C. Rudin (1996) "Optimality and Superiority: A new approach to multiple-wh ordering," *Formal Approaches to Slavic Linguistics: the College Park Meeting*, Jindrich Toman (ed.), Michigan Slavic Publications, Ann Arbor.
- Bošković, Ž. (1999) "On Multiple Feature Checking: Multiple *Wh*-Fronting and Multiple Head Movement," *Working Minimalism*, Samuel David Epstein and Norvert Hornstein (eds.), Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Bošković, Ž. (2002) "On Multiple *Wh*-Fronting," *Linguistic Inquiry* 33.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chung, S., W. Ladusaw, and J. McCloskey (1995) "Sluicing and Logical Form," *Natural Language Semantics* 3.
- Emonds, J. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*, New York: Academic Press.
- Franks, S. (1998) "Clitics in Slavic," Position paper presented at the *Comparative Slavic Morphosyntax Workshop*, Bloomington, Indiana. (downloadable at <http://www.indiana.edu/~slavconf/linguistics/index.html>)
- Fukui, N. and M. Speas (1986) "Specifier and Projection," *MIT Working Papers in Linguistics 8: Papers in Theoretical Linguistics*, N. Fukui, R. Rapoport, and E. Sagey (eds.).
- Karnio, A. (1983) "Meisiku no Koozoo," *Nihongo no Kihonkoozoo*. Kazuko Inoue (ed.), Tokyo: Sanseido.
- Kitagawa, C. and C.N.G. Ross (1982) "Prenominal Modification in Chinese and Japanese," *Linguistic Analysis* 9.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Lasnik, H. (2001) "When Can You Save a Structure by Destroying it?" *NELS* 31.
- McGloin, N. H. (1985) "No-Pronominalization in Japanese," *Japanese Linguistics* 10.
- Merchant, J. (1999) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and Identity in Ellipsis*, Ph.D. dissertation, University of California Santa Cruz.
- Murasugi, K. (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Ochi, M. (1999) "Some Consequences of Attract F," *Ligua* 109.
- Okutsu, K. (1974) *Sensei Nihon Bumpooron: Meisiku no Koozoo*, Tokyo: Taisyukan
- Saito, M. and K. Murasugi (1990) "N'-deletion in Japanese," *The University of Connecticut Working Papers in Linguistics III*.
- Yuzawa, E. (1953) *Koogohoosetsu*. Tokyo: Meijishoin.



甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻、英語英米文学専攻）を担当して、退職した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
 5. 会計、会計監査、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。

8. 評議員は、会員の意志を代表する。
9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
12. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間5,000円、学生会員については2,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 編集委員会 第3条に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第10条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙65ストローク×15行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：ワードプロセッサ（40字×20行）でA4判15枚程度
 - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65ストローク×25行、ダブルスペース）でA4判20枚程度
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 5th ed. (New York: MLA, 1999)（『MLA 英語論文の手引き』第5版、北星堂、2002年参照）に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は11月30日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を A4 判 400 字詰め原稿用紙 3 枚（英文の場合は、A4 判タイプ用紙ダブルスペースで 2 枚）程度にまとめて、3 部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

甲 南 英 文 学

No. 18

平成 15 年 6 月 24 日 印刷

—非 売 品—

平成 15 年 7 月 5 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付
